

第九回講義へのコメント

今回の講義では、前回に引き続き哲学用語である理性、知性などの言葉を学んだ。また、抽象的な概念である「ロゴス」「ヌース」についてもさらに理解を進めた。要点としては、古代哲学での「理性」とは十分な情報を集めて、対照のと味方（何が書きたかったのか不明）の情報から妥当な価値判断をする思考力を育む、つまり理性とは対話の中で育つことだということだ。

上記のことからもわかるように、今日使われている「理性」と哲学での「理性」はニュアンスも意味も異なる部分がある。哲学の世界では対話し考え討論するなどのように、積極的に自ら動いて行うという意味が多く含まれる。しかし、現代日本で使う「理性」は、「理性を働かす」などのように、行おうと意図していた行動を押さえる力を意味して使用されることが多い。このように比較してみると、かなり対照的な意味で使用されているのがわかる。

しかし、この哲学的な「理性」の意味がさらに一般的になることは、現代にとってよいことだ。何かしらの過ちを犯したとき、「理性が効かなかった」という一言で済まされていることもあるからである。薬物乱用や、性的被害もそれらの言葉で言いくめられることもある。理性は思考力であり、対話の中で育つものだということが広まれば、意志があることがはっきりするのだ。

カント 哲学における悟性とは、五感である感官から生まれた、規則を介して諸現象を統一する能力のことである。そして理性とは、感官から始まったすべての認識の終着するところであり、諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力のことである。そのため理性は経験やその他の対象にかかわるのではなく悟性にかかわり、その悟性に概念によって統一を与えていく働きをする。悟性に与えるこの先験的な統一は理性統一と呼ばれるが、この統一は悟性によってなされる統一とは全く別のものである。

これらを英訳したときに出てくる **concept** や **notion** という言葉は概念という言葉で使われているが、同じようにこの文章内で使われている **idea** という語は本来、観念という意味であり、前に挙げた概念という言葉とはほぼ同じような意味であるが、必ずしも同様に使われるとは限らない。

コメント [y1]: 「理性を働かす」とは、「冷静に考える」という意味ではないですか？

コメント [y2]: 具体的にそれぞれどのような意味なのか説明してください。

今回の授業では、前回やった知性であるヌース(理性)、インテレクトゥス(理性)、understanding(悟性)と理性のロゴスとラチオの意味の復習をした。またカントの『純粹理性批判』を取り上げ、すべての認識は感官から始まり悟性へと進み、理性において終わることがわかった。理性を超えた範囲では直感を素材とした統一にもたらすべきより高次のものは全くないとカントは考えている。そして、その具体的な意味は、悟性は規則を介して諸現象を統一する能力で、理性は、諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。理性は悟性による統一とはまったく異なるものであり、悟性に関わり、概念によって統一を与えるものである。

コメント [y3]: 具体的にどのようなことか、例を挙げて説明できますか？

また、ある言語を同じ意味を持つ別の言語にうつす翻訳に関しては文章で説明することにより、たいてい理解可能なものとなるが単語として(哲学用語として)翻訳することが必要な場合にはであると文章にするわけにいかないのでことができず、元の言葉の意味の一部が切り捨てられてしまう。そのため、へたに日本語に翻訳して哲学用語を理解するのではなく、原文や英語などで哲学用語を理解すべきだ。なぜなら例としてあげられている存在の意味でもギリシア語と英語では意味の一致する単語があるが、日本語になると意味がかけてしまうからである。たしかに、他の言語を学ばなければならないという手間もかかるが、英語で学ぶのなら他の場面でも応用がきくし、哲学の文の英訳のほうが日本語でかかれた文章よりもわかりやすい。日本語では意味がかけているため、日本語では理解しがたくなっている。そのため、哲学の文章を読むときには日本語に翻訳された文章を読むよりは英訳されたものなどを読むべきだ。

コメント [y4]: 具体的にどのような意味がどうしてかけるのか、説明してください。

コメント [y5]: それはそうですが、多くの人にとっては実行困難でしょう。

人間がどのようにものを考えるかは概念区分をどうやって作るのかというところから始まる。概念区分の作り方を書いたのがカントの『純粹理性批判』で、近代哲学における「理解」の理論である。

全てのものは感覚(senses)で始まり、悟性(understanding)を経て理性(reason)にたどり着く、そしてものに輪郭を与えて物とし、名前をつけて概念をつくる。チョークというものや、人間というものは実際には存在しなく、概念として作られたものである。物事は全て自然法則で動いている。

日本語に訳された論文はきちんと訳するために難しい言葉を使って難しい訳を作ってしまう、なので英語で書かれている元の論文を見た方が簡単に理解できることが度々ある。

近代哲学における「理解」の論理を学んだ。前回の授業で「理性」とは、理解し理解に基づいて何かを作り出すヌース、説得や論証の手段であるロゴス、計算するという意味のラチオがあると学んだ。ロゴスの方がヌースよりも優位に立つものなのだ。カントは、我々のすべての知識は、**senses** から始まり、**understanding** へと進み、**reason**(理性)という最高の機能である思考による概念的な統一がなされると述べた。我々の知識や認識は直観によって始まるのだ。

我々が普遍的な結論を出すことができるのは、**reason**(理性)があるからだ。直観によって得た感覚から抽象化が行われて、概念がなくなる。理性が操るようになり、普遍的結論を出すことができるようになるのだ。

今回は前回の授業からの続きで、「悟性」や「理性」の意味について考えた。

「理解」についての理論を扱った英訳文書や、坂部恵さんの著書から改めて見てみると、「悟性」と「理性」の意味が**古代ギリシア哲学と近代哲学の間で逆転**している。ここから、言葉の意味を翻訳することがどれほど難しいかがよく分かった。翻訳とは「同じ意味を別の言語に移す」という試みであり、一語で置き換えることは困難なことが多いが、文章で説明をするとたいいてい意味は理解できるようになる。しかし、それでも本来の意味をつかむことが難しくなるのは、哲学用語だと文章にするわけにはいなくなるため、元の言葉の一部の意味が切り捨てられてしまう。このことから正しい意味がかすんでしまうのだ。時代や国が違う中で作られた言葉をそっくりそのまま訳しきることは不可能であるが、近い意味として理解するには正しい哲学の知識が必要である。今回の授業を聞いても、いまいち「悟性」と「理性」の違いをはっきり区別できないし、何時間もかけて理解しなければならない必要性をあまり感じないのだが、これは私の「哲学」に対する知識がまだまだ薄いからなのかもしれない。

ただ、日本語で哲学用語を訳したものよりも英訳を見たほうが分かりやすいというのが、**日本語が難しい言語**と言われる一端を表しているようだった。

コメント [y6]: ヨーロッパ言語の話者にとっては難しいということであって、「絶対的に難しい言語」ということではない。

近代哲学における典型的な「理解」は感官から始まり、そこから悟性、そして理性に終わる。この悟性と理性は具体的に説明すると、悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとすれば、理性は諸悟性規則を原理のものへと統一する能力である。「理解」の理論の英訳でも **sense**→**understanding**→**reason** の順に認識されるとなっている。これはラテン語とギリシア語にも対応していて、ラテン語では **sensus**→**intellectus**→**ratio**、ギリシア語ではアイステーシス→ヌース→ロゴスとなる。しかし、このギリシア語だけを見ると日本

語に訳したとき、感覚→理性→理性ともなる。同じ言葉であるからといって意味まで一緒だとは限らない。時代や国によって言葉の意味が異なる。同じ意味を別の言語に移すという翻訳の過程で言葉が重複した。一語で表すと理解が困難であるが、文章で説明すると大抵は理解可能となる。哲学では文章にするわけにもいかないため訳語が混乱するが、訳語が持つ本当の意味を見出すことが重要である。

1,ヌース(理性)理解する力。作り出す力

インテレクトゥス(理性)理解する力

Understanding(悟性)理解する力

ヌースとロゴスは同じ理性という訳でもニュアンスが異なるので注意する。まだ近代哲学における典型的な理解の理論は感官→悟性→理性という順序でこの考えはカントによるものでカントは思考による統一を唱えた。悟性と理性の違いは悟性は規則を介して諸現象を統一する能力であるのに対し、理性は諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。私たちは感覚によってものを認識するがその感覚は本物のものとはちがう。

感覚→understanding →概念 という順序で概念が形成されていく。

2,ものに対する感覚と本物はやはりちがう

3 私たちが日頃見ているものたちはすべて目が作り出したもので本物を見ているかどうかは人間にはわからない。空が青いと感じるのもやはり人間の感覚であり特に星は私たちが見ているのは今の姿ではなくずっと昔の姿を見ているに過ぎないから。

今回の授業では、哲学的用語における大まかな変遷・その意味の変化について学んだ。

ヌースやロゴスといった「理解すること」に関する用語は、単にものを見る、赤い物体や広く平らなものといった漠然としたもの見かたではなく、それがチョークである、コンクリートの壁である、といった本質的なものとしてみる必要があることを意味するのである。その中に様々な色の差異を初めとした違い、即ち「個性」というものは存在するが、寧ろ個性というものがあらゆるものに存在するが故に、「人間そのもの」「チョークそのもの」といったような「概念そのもの」というのは存在し得ない。人間が個性あるそれらを表彰し一つに纏めるために存在するのであって、カントの言うとおりの「概念は思考の中にある」のである。また、われわれの全ての認識は感官からの情報、すなわちぱっと見たものから始まるため、赤や緑を初めとする色のような見たそのままではしか表せない概念というものはそれを知らない者に説明することはできない。

カントによると、認識の全ては理性によって最高点となり、理性こそが悟性を含むあら

コメント [y7]: 空は青色の波長の光を散乱させるため、すべての人にとって青く見える。また、星が昔の光なのは、光の速度が有限だから。授業で述べたことは、そうした物理的な現象と、感覚質とが異質だということ。

ゆる理解を総括する。それゆえに理性というものは感官を初めとした認識の発端によって生み出されるものではなく、その一つ高次に位置する悟性の相互作用によって、それらに概念的な統一をもたらすものであるのだ。そしてその理性による認識は、悟性によるそれとはまた違った統一をもたらすものである。

ある言語を別の言語へと換言する翻訳という作業は非常に難度の高い技術である。その語の持つ本質的な要素、欠かせない要員というものを踏まえたうえで最もその本質に近い語句を全く別の言語の中から生み出さなくてはならないからだ。そのため一語で翻訳が出来るというのは困難な場合もあり、文章で説明すればなんとかなる、といった程度にしかなりえない場合もある。しかしながら哲学における用語に関しては文章で長たらしく述べ続けるわけにもいかないので、否応なく元の意味の一部が切り捨てられてしまうこともある。だからこそ、その人の思想について完全に知りたいという場合には、その著者の書いた原本を直接読むことが大切なのである。

コメント [y8]: 具体的にどのような言葉について、どのような意味がどうして切り捨てられるのか、説明してください。

今回は、前回の講義のコメントをもとに引き続き、理性、知性といった哲学用語についての講義だった。日本語で知性と訳されるギリシア語のヌースやラテン語のインテレクトゥスは、物事を理解する力、新たな理論を作り出す力という意味がある。日本語で言う理性は、ギリシア語でロゴス、ラテン語でラチオと言って計算や理論を進める事を意味した。本来、両者は別物であるが翻訳の過程で混同されたり、順序が逆転したりした。

カントの時代には既に混乱が影響しており、彼は認識を、感覚、悟性(知性)、理性の順で得られると説いた。古ギリシアにおいては、知性と理性が逆転しており、知性の方が上位であった。カントにおける知性、英語で言う **understanding** は見かけの現象、個物などから感覚で得たものを整理し、概念を作り上げる能力であり、対して **reason**、つまり理性は知性が作り出した概念を統一するものである。

また、コメントに翻訳という作業は難しいものであるといった旨のものがあつたが、一語で他の語を翻訳することは難しくとも、文章で説明すれば大体は理解できる。しかし、哲学用語は一々文章にしているはきりがないので、翻訳される際に、本来の語の意味の一部が欠落してしまう。

現在、苦戦しながら、光文社から出ている『純粋理性批判 1』(中山元訳,2010)を読んでいる。その中で、どうしても自分が理解しているかどうか怪しい部分があるので、質問したい。同書の中で、「すべての物体は広がり [=延長] をもつ」という命題は「分析的な判断」、つまり「物体」という主語の概念の中に「広がり」という述語の概念が含まれており、この命題の判断には経験は必要ないといった旨のことが書かれている。それに対して「すべての物体は重さをもつ [重い]」という命題は、述語「重い」が物体の概念の中に含まれないので、命題は総合的且つ経験的な判断であると述べられている(p32,p33)。

コメント [y9]: 訳者による詳細な解説がついていますから、カントの本文を読んだ後にその解説をよく読むことを勧めます。

私はこの「すべての物体は広がりをもつ」という命題が経験的ではないということに疑問があった。「すべての物体は重さをもつ」という命題に関しては、実際に物体を持たなければ重さがあることを確認できないから経験的な判断であると理解している。しかし、物体が空間を占めるということは触れてみなければ分からないのではと考えたので「すべての物体は広がりをもつ」という命題も経験的な判断ではないのかと考えた。だが、読み進める内に「空間」という概念はアプリアリなものであると述べられていたので(p79)、「広がり」という述語自体が、「空間」という経験ではなく先天的に獲得している概念によるものであるため、上記の命題が経験的な判断ではないという結果になると結論づけた。この解釈に間違いや直した方が良い箇所があるならば、ご指摘いただきたい。

参考文献・ウェブページ一覧

1)カント『純粋理性批判 1』中山元訳,光文社,2010.

カントによると、我々のすべての認識は感官から始まり、悟性へと進み、理性において終わる。しかし、理性を越えては、直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらしべきより高次のもは、何一つとして我々のうちには見いだされない、というのが近代哲学における典型的な「理解」の理論である。もしも論理と現実が食い違っていたら、論理の方がえらい。また、具体的なところから出発して分かっていくこともある。

概念的な統一は、思考によるものだ。そして直観とは、直接見て取るということである。我々の知識や認識はまず見てから始まるのだ。senses→understanding→reason という順番である。understanding とは、感覚から輪郭、名前、物というように、抽象化されていくことだ。そして、概念がなくなり、理性が操ることで、普遍的結論が出るということか reason である。そして、理性はわれわれ人間にとって最高の機能である。

~~しかし~~、~~実際~~翻訳は難しい。同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているが、そもそのその言葉の意味を理解することで、哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことが重要なのだ。

今回の授業では、西洋哲学のカントの「理解」の理論について学んだ。近代哲学における典型的な「理解」の理論は、理性が人間の認識活動の最高の機能であるということだ。人間の認識や知識は直観から始まり、それを受け取ることから始まる。カントは全ての現象はいくつかの自然法則で動いていると考えた。そして、個々の現象は実在しているが自然現象はどこにあるのかを定義できないため、自然法則や自然概念は我々の思考の中のものであると考えた。また、我々は感覚によって物を認識する。しかし、感覚自体は物その

コメント [y10]: これはデカルトによる物体の定義。個々の物体が広がりを持つかどうかは触ってみないと分からないが、そもそも「物体というものは広がりを持つ」という定義がないと、触って確かめようにも、何を確かめるべきなのかが分からない。

ものではないため、真の实在を認識することはできない。つまり、感覚によって得られるものは真の实在ではないと考えた。この世界の中に概念はないが、それぞれ妥当な理解、普遍的な結論がある。例えば、物としては別であるが同じ部類に含まれるといったことだ。このようになるのは、我々は感覚器官を通して輪郭を認識し、物を認識し、名前をつけているからだ。それが個物と関係のない抽象概念となり、普遍的な結論に至るのである。これらのことから、理性は、概念や普遍的な結論のような具体的な経験に関わらないといえる。

今回の授業は、先週の授業の内容の補足だった。

知性や理性などの哲学用語を勉強するのは、哲学上の基本概念を正しく理解することが目的である。知性は、ギリシャ語のヌース、ラテン語のインテレクトゥス、英語の **Understanding** がある。理性は、ギリシャ語のロゴス、ラテン語のラチオがある。ヌースの訳としての「理性」と、ロゴスの訳としての「理性」は異なる。

カントは、「純正理性批判」超越論的弁証論・序論で、「我々のすべての認識は感官から始まり、そこから悟性(verstand)へと進み、理性(vernunft)において終わるが、理性を超えては、直観の素材を加工して、それを最高の統一にもたらすべきより高次のもは、何一つとして我々のうちには見出されない」という。また、「悟性が規則を介して諸現象を統一する能力で、あるとすれば、理性は、諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。理性は、それゆえ、決して最初の経験ないしは何らかの対象にかかるのではなく、悟性にかかわり、隠して悟性の多様な認識にアプリアリな統一を概念によって与えるのであるが、このアプリアリな統一梁成(理性統一)と呼ばれてよく、それはまた、悟性によって遂行される統一とはまったく別種のものである」とも言っている。カントは、人間がものを考える際の概念区別をどのように作るのかについて考えた。ここでは、**understanding** と **reason** が逆転している。我々が経験するものは **appearance**(見かけの認識)であり、本当の实在は認識できない。感覚によってものを知るが、それは真の实在ではないのだ。

翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みである。一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいてい理解可能になる。しかし、哲学用語でと、文章にするわけにもいかないのが、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることになる。なるほど。

初めに、近代哲学における典型的な「理解」の理論を述べる。カントは著書である『純粋理性批判』の超越論的弁証論・序論で、「われわれのすべての認識は感官から始まり、そ

こから悟性(Verstand)へと進み、理性(Vernunft)において終わるが、理性を超え出では、直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらすべきより高次のものは、何一つとしてわれわれのうちには見いだされないと述べている。これの英訳は、「All our knowledge starts with the senses, proceeds from thence to understanding, and ends with reason, beyond which there is no higher faculty to be found in us for elaborating the matter of intuition and bringing it under the highest unity of thought.」である。この英文において、「understanding」は悟性に、「reason」は理性へと日本語訳されている。

次に、悟性や理性を、具体的に述べる。悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとするれば、理性は、諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。理性は、それゆえ、決して最初の経験ないしはなんらかの対象にかかわるのではなく、悟性にかかわり、かくして悟性の多様な認識にアприオリな統一を概念によって与えるのであるが、このアприオリな統一は理性統一と呼ばれてよく、それはまた、悟性によって遂行される統一とはまったく別種のものである。これの英訳は、「Understanding may be regarded as a faculty which secures the unity of appearances by means of rules, and reason as being the faculty which secures the unity of the rules of understanding under principles. Accordingly, reason never applies itself directly to experience or to any object, but to understanding, in order to give to the manifold knowledge of the latter an a priori unity by means of concepts, a unity which may be called the unity of reason, and which is quite different in kind from any unity that can be accomplished by the understanding.」であり、「understand」と「reason」の役割が、「intellectus」と「ratio」からきれいに逆転している。

最後に、翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みである。一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいてい理解可能になる。しかし、哲学术語だと、文章にするわけにもいかないのが、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。以下では「存在」を例に用いる。ギリシア語では、「オン(ον)」ないし「ウーシア(Ousia)」は、ギリシア語の Be 動詞の名詞形となりであり、英語では、「Being」となる。Be 動詞の意味である存在すなわち実在(existence)と、「~だ」すなわち繫辞(copula)では、「存在」では半分しか訳されていない。それは、哲学の主要なモチーフの一つである「存在論(Ontology)」が、日本語では理解しがたい原因の一つなのだ。

ヌースの訳語としての「理性」と、ロゴスの訳語としての「理性」は異なる。ヌースの「理性」は何かを作り出そうという能動的な意味を持つが、ロゴスの「理性」はこの意味を持たない。これが前回の授業の要点だった。感覚を通してものを見て、知性や理性を使ってもものに対して妥当な理解をする。だから、知性や理性は世界について理解する力であ

る。学ぶ時も目に見えるものや言葉から学ぶが、そこからは知性や理性の働きになる。また、ロゴスやラチオも計算だが、デカルトの大陸合理論も計算第一主義である。計算と現実のどちらかに不具合が生じた場合、現実の方が誤っているとする。例えば、物が物理法則により計算した結果と違う落ち方をした場合、間違っているのは計算ではなく、真空状態にしていない現実の方となる。しかし、ここで考えてみると、そもそも世界が計算に従う理由なんてない。本当に計算や論理が第一で現実がその次なのだろうか、という疑問が浮かんでくる。

カントによると、我々のすべての認識(正しい知識)は感覚器官から始まり、そこから悟性(Verstand)へと進み、理性(Vernunft)において終わる。だから、感覚、悟性、理性の順番でものを理解し、理性を超えるものは存在しない。

悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとすれば、理性は、諸悟性規則を原理のものへと統一する能力である。だから、理性は最初の経験ないし何らかの対象にかかわるものではない。理性は悟性にかかわり、悟性の多様な認識に論理的な、また必然的な統一を概念によって与える。そして、この必然的な統一は理性統一と呼ばれてよく、またこれは悟性によって遂行される統一とは全く別物である。ものそのものではないものを感覚により知覚し知性(Understanding)によって概念という形で、物をくくり、世界に秩序を与える。そしてその概念を理性(Reason)により統一する。これが自然法則であるため、これは普遍的なものである。ここで分かるように理性は個物からつくる抽象的な概念にしかかかわっておらず、1つ1つの個体とはかかわっていない。例えば犬は1つ1つの犬で名前や犬種が違うが1つの「犬」としてひとまとめにされる。つまり、抽象概念が同じなのだ。個体としての犬は存在するが、「犬」というのはどこにもいない。この考え方はプラトンのイデアや平均の考え方と似ている。そして、ラテン語ではセンスス、ラチオ、インタレクトゥスの順番でものを理解していたのに、英語では感覚、知性(悟性)、理性の順番になっており、後の2つが逆転していることが分かる。

同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているので、そもそもの意味を理解することが大切だ。だから、翻訳というのは難しい、という意見があったが、そもそも翻訳とは「同じ言葉を別の言語に移そう」という試みであり、確かに、1語で置き換えられない場合もあるが、たいていの場合文章で説明すれば理解可能となる。例えば、「Be」という言葉も英語では「〜がある」、という所有存在の意味を表わす場合と「〜は〜だ」という属性、性質、述語を表わす時がある。これを1語で同じ日本語を当てるのは無理かもしれないが、文章で説明するときちゃんと伝わる。しかし、哲学用語では、文章にするわけにはいかないから、元の言葉の意味の一部が切り捨てられたりする。それがヌースからラチオに変わるときの能動的な意味だ。以上が今回の授業の要点だ。

カントによると、私たちはものそのものではなく、悟性により作られた抽象概念を理性により統一することで、世界を理解している。しかし、その概念自体は言葉である。つまり言語からできたものである。「犬」というのは日本語特有であって、アメリカでは「犬」

の概念は理解されない。「Dog」として理解される。犬の場合は日本語と英語で対応する言葉がちょうど同じなので問題はないが、例えば先ほどのように「存在」と「Be」は必ずしもぴったりと意味が重なっていない。そうになると、言葉が違ってくるので日本人とアメリカ人やイギリス人との概念は異なっていることになる。つまり、違う言語を話す人たちと私たち日本人とでは概念が異なっており、そうになると、私たちがこうだ、と思うことを外国人が違うようにとらえることもある。だから、話す言語が違うと知覚の段階で違うように見える。見てるものは同じ犬でも、もしかしたら、違う国の言語では「猫」と認識していて違ったように見えることもあるかもしれない。

コメント [y11]: 犬を猫だと認識したら、それは間違いです。

今回の授業は、前回の授業の補足を主にした。ヌースの訳としての「理性」と、ロゴス訳としての「理性」は異なるというのが前回の要点だった。今回は、我々は目の前に見えているものは、ただの色の流れであるものを、輪郭づけをして、理解をしている。本物の円は存在しないのに、人間は円と理解して、円周角の定理など普遍的な理論を見出している。このように、厳密には違うものを抽象概念でとらえて、普遍的な理論として存在していた。また、翻訳は難しいということも知った。翻訳とは、「同じ意味を別の言葉に移そう」という試みで、一語に置き換えることは困難な場合もあるが、文章で説明すると、意味が理解することができる。しかし、哲学用語は、文章にするわけにはいかないということで、一部を切り捨てられることにより、一部しか残らないということだった。

今、私が目に見えているもの網膜に映っているものは色の流れであるということは考えたこともなかった。当たり前のように、物を理解していた。突き詰めて考えていくことで、物の見方が変わってくることもあるんだということを知れた。

アナクサゴラス(B.C.500 頃から 428 頃)は、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。種子は人間には認識できず宇宙ないしは神の「知性」が種子を認識し混同する。アリストテレスのロゴスは論証(アポダイクシス)であり、ヌースは何らかの前提を把握する能力(エパゴゲー)である。ロゴスは何らかの前提を出発点として論理で前へ進むので、プラトンの共有されているものから論証を始めるデディアレクティケーに通じるものがある。一方、ヌースは基本的に外界に対応する受動的なはたらきだ。英語では「to see so as to remark or discern」と表わされる。そして「受動的な知性」があるなら「作る知性」(to purpose, intend)もある。ただし中世哲学では「作る知性」とは呼ばれず「能動知性」(intellectus agens)と呼ばれた。

近代哲学における典型的な「理解」の理論は、われわれのすべての認識は感官から始ま

りそこから悟性(Verstand)へと進み、理性(Vernunft)において終わるが、理性を超え出は直感の素材を加工してそれを最高の統一にもたらしべきより高次のものは何一つとしてわれわれのうちには見いだされない、というものだ。

悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとするれば、理性は諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。だから理性は最初の経験または何らかの対象にかかわるのではなく悟性にかかわり、その悟性の多様な認識にアプリアリな統一を概念によって与えるのである。しかしこのアプリアリな統一とは理性統一と呼ばれ悟性によってなされる統一とは全く別物である。

同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているがそもそもの意味を理解することで、哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことは重要である。同じ意味を別の言語に移そうとすることは難しいが、一語では無理でも文章で説明をすればたいていは理解可能になる。しかし哲学用語では文章にするわけにもいかず元の意味の一部が切り捨てられることにもなる。例えば「存在」はギリシア語では「オン」ないしはギリシア語の Be 動詞の名詞形の「ウーシア」。英語では Being。Be 動詞には存在のほかにもう一つ、「~だ」という意味もある。つまり「存在」では半分しか訳されていないということになる。これは哲学の重要なモチーフの一つである「存在論・Ontology」が日本語では理解しがたい事の一因。

「同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているがそもそもの意味を理解することで、哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことは重要である」の「そもそもの意味」とは人によって変わってしまうのではないか。もちろんここで「ひとそれぞれだから」などという主張をするつもりはない。ただ日本人が英語を訳すときに意味がたくさんある単語があったり、少しの日本語の違いからニュアンスが変わったりするということを主張する。

今回の講義では前回の分かりにくかったところの補足説明だったり、解説などを行ったりしていた。改めて、ヌースの訳である「理性」が理解する力、ロゴスの訳である「理性」が計算を表していること、「悟性」が規則を介して諸現象を統一する能力、「理性」が諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力であることを学んだ。

また、英語のほうが哲学をよく知れることも講義の中で話題に上がった。その理由は哲学に関する用語を日本語で表す概念がなかったからである。だから、英語で哲学を学んだほうが手っ取り早い。確かに、フィリピンやマレーシアでは物理や化学、数学の用語がフィリピン語やマレー語で訳されていない。それに伴い、フィリピンやマレーシアでは化学や物理、数学は英語で学んでいる。しかし、日本では大学のような高等教育の場でも日本語によって授業が進められている。このような状況になったのは明治時代の人による翻訳

コメント [y12]: もしもあなたに英語のニュアンスが理解できなければ、日本語と英語でニュアンスが異なることも認識できないはず。その場合、英語のニュアンスを、日本語を通じて理解しているのではないですか？だとすると、英語のニュアンスを、日本語でも表現できるということになるのではないですか？
また、翻訳したつもりでニュアンスが変わってしまったなら、それは誤訳ではないですか？

コメント [y13]: 根拠となる出典を記載してください。

のおかげである。鎖国をしており西洋諸国に出遅れていた日本は学問を収める修めるだけでなく、学問を広げようとした。だから、明治の学問を収めていた福沢諭吉のような現代の偉人たちがいろいろな単語を日本語に翻訳したおかげで今、日本語で高等教育を受けることができている。しかしながら、そのことが裏目に出て日本人は英語が苦手になっている。高等教育を母語で受けることができることはいいことか悪いこととこのを判断することは難しいが、私個人としてはすばらしい環境の下で教育を受けていることを世界に向かって誇れる。

コメント [y14]: 明治の先人たちの成果であって、あなた個人の手柄ではないですが、どうしてあなた個人が誇るのか、説明してください。

カントによると、Reason と訳される「理性」は、諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。それゆえ理性は、決して最初の経験ないしなんらかの対象にかかわるのではなく、悟性にかかわり、かくして悟性の多様な認識に超越的な統一を概念によって与える。しかし、この統一は理性統一と呼ばれてよく、それはまた、悟性によって遂行される統一とはまったく別のものである。Understanding と訳される「悟性」は、規則を介して諸現象を統一する能力である。これは、感覚し、輪郭を認識し、名前がついて物になるという流れである。この流れで、概念がなくなり、理性が操り普遍的結論が出る。

今回の授業から、幾何学のことや、認識は感官から始まり悟性に進み、理性で終わる。したがって、理性を超えるものは存在しないということを学びました、悟性とは現象を規則で統一する能力であり、理性とは規則を原理へと統一する能力であるということも学びました。

今回の授業から、いくら外見が犬の猫であってもパッと見たときに猫だとわかるという考えに疑問を抱きました。なぜなら、外見が犬であるなら、直感的に感官がそれを犬だと判断するはずだからだ。

コメント [y15]: もちろんそうなるでしょう。それは、感官が誤ったということです。感官は誤ることがあるというのはプラトン以来指摘され続けています。

具体的な悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとするならば、抽象概念で普遍的である理性は諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。

「同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているが、そもそもの意味を理解することで、哲学においてのその言葉が持つ本当の意味を見出すことが大切である。」という質問があったが、そもそも人間とは出発点は同じであるので、同じような経験をしている。翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みである。一語で置き換えることが困難

な場合もあるが、文章で説明すれば、たいてい理解可能になる。しかし、哲学用語だと、文章にするわけにもいかないのが、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。

カントの『『『純粋理論批判』』超越論的弁証論・序論(訳文は坂部恵「ヨーロッパ精神史入門」 p.133~134)に「われわれのすべての認識は感官から始まり、そこから悟性(Verstand)へと進み、理性(Vernunft)において終わるが、理性を超えては、直観の素材を加工してもそれを最高の統一にもたらしべきより高次のもは、何一つとしてわれわれのうちには見いだされない。」とあるが、このようなことはよく感じる。なぜなら例えば、最初人にもものを教えられたとき、口で説明されて頭で考えて理解するよりも、実際にやってみて感じてみた方が覚えやすいということがよくあるからだ。

コメント [y16]: カントの主張とは別のこととです。カントは、「頭で考えて理解する」とはどういうことなのかを説明しようとしています。

カントによると、われわれのすべての認識は感官から始まり、そこから悟性へと進み、理性において終わるが、理性を超えては、直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらしべきより高次のもは、何一つとしてわれわれのうちには見いだされない。こうした理論はというのは近代哲学における典型的な理解の理論とされている。悟性や理性とは具体的には悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であり、理性は諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。またアリストテレスは魂について、自然全体においては、あるものは各々にとって質料であるが、あるものはそれとは異なっていて、ちょうど技術が質料に対して持つ関係のように、すべてのものに作用することによって、原因であり作用するものであると説いている。

コメント [y17]: 具体的にどういうことだかわかりましたか？

私はそれまで時代や言語によって意味が違って来るから、その言葉の持つ本来の意味を知ることが難しいと思っていましたが、今回の授業で提示されていた英文と日本語を見比べてみて、ほとんど同じことを書いてあったのでそれが間違いであると気づくことができました。

「我々の認識は感覚(直観)から始まり、悟性 understanding から理性 reason に終わる。理性が人間の最高能力である。直観を素材を使用して概念的な統一を行う。概念を操作することで普遍的な結論を得ることができる。」という内容の、カント『純粋理性批判』超越論的弁証論・序論の日本語訳と英語訳を比較すると、understanding と reason が、intellectus と ratio から逆転している。

翻訳とは「同じ意味を別の言語に移そう」という試みであるが、哲学用語だと 1 つの語に多くの意味があり、その意味を全て文章にすることもできないので元の言葉の意味の一部が切り捨てられることになる。

自分の理解力が足りず、『純粋理性批判』の日本語訳が理解し難かったが、英語訳の方がかえって分かりやすかった。今まで資料を集めるときは日本語か英語の資料を探せばよかったが、大学では専門的な分野に進んで研究するので文献や原本が英語であるケースは少なく、それ以外の言語の習得しなければいけない。積極的に言語の習得を進めていくことが必要だ。加えて、自分の場合は日本語の理解力を高めることも並行して進めていく必要があると学んだ。

今回の講義の内容は、前回の内容の復習と、近代社会における「理解」の理論、理性や悟性の具体的な説明であった。私たちは、感官、悟性、理性の順にモノを認識する。悟性とは、規則、つまり、今までの経験をもとに諸現象を統一する能力である。また、理性は悟性が定めた経験的認識に、より先立つもの、つまり、先天的認識の統一を概念によって与える能力である。そのため理性は、決して経験や対象に関わらない。よって、理性によって与えられる統一は、悟性によって与えられる統一とは全くの別物である。

また、人間の理解は、目で見ること、つまり感覚から全てが始まる。確かに、実際にものを見なければ、それが何なのかは一生わかるはずがない。例えば、目をつぶった状態で、匂いを嗅いで「これはリンゴだ」と判断しても、実際はリンゴの匂いがする消しゴムかもしれない。それが本当にリンゴであるかどうかは目をつぶったままでは分からない。モノを見ないことには何も始まらないのだ。よって、ものを理解、認識する際、**見ることはとても重要な行為である。**

コメント [y18]: 目の錯覚ということもありますから、目だけが重要ではありません。

まず前回の要点のまとめとして、ヌースの訳としての「理性」と、ロゴスの訳としての「理性」は異なる。ヌースは理解する力、作り出す力という知性によるもので、ロゴスは計算するという意味合いがある。

またカントの『純粋理性批判』の日本語訳と英語訳を比較した。Senses=感官、Understanding=悟性、Reason=理性と訳されており、知識・認識は直感からしか得られないという内容だった。近代では、「概念が存在するというよりは個別的な現象があり、すべての現象は自然法則に従う」と結論が出されていた。

哲学の基本原理に、「知性」という意味のヌース、インテレクトゥス、Understanding と、「理性」という意味のロゴス、ラチオ、reason がある。このうち、ヌースの訳としての「理

性」と、ロゴスの訳としての「理性」は異なるということが重要である。理解し、理解に基づいて何かを作り出すという言う意味のヌースに対して、ロゴスは説得や論証の手段として用いられる、よって同じ「理性」でも意味が異なるのだ。

近代哲学において高名なカントは、「純粹理性批判」超越論的弁証論を著した。超越論的とは、人間の考えのもととなるものを探す、といった意味がある。この著書が世間に知れ渡ってから、understanding と reason の意味の逆転が起こったといわれている。悟性は規則を介して諸原則を統一する能力である一方、理性は諸悟性規則を原理のもとへ統一する能力である。理性は悟性に深くかかわり、人間が思考するときも、感覚→悟性→理性の順に行われる。

哲学用語が翻訳される際、元の意味からいくつかの意味が抜け落ちることがある。本来であれば、いくら複雑な単語でも文章にすれば意味が理解できるはずだが、哲学用語の場合、そういうわけにはいかない。それゆえ、いくつかの意味が欠落することがある。例えば、ギリシア語と英語の「存在」についてこういった事例がある。ギリシア語の be 動詞の名詞形はオンないシューシアである。英語だと、being と訳される。しかし、be 動詞の意味は「存在」と「〜だ」という意味となり、半分に欠落してしまう。

最近、哲学の講義が以前より難解になったと感じる。どれだけ難解な用語でも意味をしっかりと理解すれば、内容の把握はできると思うので、これ以降に新たな用語が出てきても、しっかりと対応していきたい。ところで、日本語訳の哲学書本文より、英訳されたほうが容易に理解できたのは新たな発見であった。単語さえわかれば読解できそうなので、哲学書を通読する際、英訳の版も揃えておいたほうが理解がよくなるだろう。ぜひ実行してください。

今回の哲学思想の基礎では、前回言葉の意味を学んだ知性や理性というものを、我々人類がどのようなときに、またどのように用いているのかを詳しく具体例を挙げながら学びました。

前回の講義で学んだ知性、理性、悟性が、なぜ人間に必要なのかというと、それらは人間が世界そのものを理解するときに、用いる言葉であり働きであるからです。

まず、我々は何かを理解するとき、自らの感覚でとらえたあとに、それに対して妥当な理解をおこない、全てのものを個物ではなく、実際には存在しない抽象概念として把握する精神上的働きが行われます。

これは例える 喩えるならば、自分の目の前の文房具を、それぞれそれに対応する感覚から、それが自分の記憶の中での鉛筆や消しゴムであることを理解し、それを抽象概念化した、それそのものは存在しない「鉛筆」や「消しゴム」として把握するという働きとして言い表されます。

個々の鉛筆や消しゴムは、細部を注意深く観察すれば、それぞれ大きく異なる個物であることは明白です。しかし、我々は精神上で、それらを存在しない「鉛筆」や「消しゴム」として、抽象概念化したものへとそれぞれ分類していきます。

この一連の抽象化の精神の働きを悟性と呼び、悟性の働きによって、個物を抽象概念化したものを加工、または操作する働きを理性と呼びます。よって、悟性は自分の感覚から抽象概念へと把握する働きであり、理性は抽象化された概念そのものを操作する働きであり、その働きは本質的に大きく異なるものです。

また、悟性によって作り上げた抽象概念を、理性でもって操作することで、普遍的な理論を構築することが出来ます。

哲学とは、形而上学的なものや抽象的なものを求める学問だと思われがちですが、本来哲学は文化によって異なるものでなく、これらの働きを利用し、すべての文化において普遍的なものを求める学問であります。

特に、物理学等で論理と現実が食い違ったときに、論理を優勢とするのは哲学の考え方がよく表れている例のひとつです。これはデカルトの論理主義、なんでも世界は計算で求められるという計算万能主義なラショナリズムの考え方が大きく影響を与えています。

また近代の大哲学者の一人であるカントは、純粋理性批判という著作の中で超越論的弁証論を展開しました。それは、我々は理性によって構築された概念区分をどうやって考えているのか。そしてその概念を操作したものである理性は、自らの感覚でとらえた悟性から抽象化したものであるがゆえに、理性からは理性以上の高次のもは見だせないという理論です。

ここで私が疑問に思ったのは、哲学は「悟り」や、「啓示」といった感覚そのもので捉えられない、いわばこの世界に実在しない、最初から抽象概念化された感覚をどのように処理してきたのかということです。

普遍的な理論を構築するのは、感覚から抽象概念化されたものでなければならないのであれば、それらは普遍的な理論を構築する際に無視されるべき概念なのではないでしょうか。

また、自分の感覚で直接感じ取れないものを信じる人間も、自分の感覚で直接感じ取ることが出来ないものの存在を信じない人間がいるとするならば、その抽象概念は人類すべてに当てはめられる普遍的な理論といえないのではないのでしょうか。啓示については、哲学理論の中に入らないものとして、西洋では神学で扱われてきました。

今回の授業では主にカントの話で、モノを実物ではなく概念ととらえること、認識は感覚から始まりそこから悟性(understanding)へ進み、理性(reason)において終わること、この二つは近代哲学から見事に逆転してしまっていることを学んだ。純粋理性批判の内容を日本語と英語両方で読んだり、翻訳する時は文章で説明するとかいできるということな

コメント [y19]: 「啓示」は抽象概念ではありません。

ども学んだ。

私は最近読書レポートを書くために鈴木孝夫の「ことばと文化」という本を読んだ。それには英語と日本語の言葉の構造の違いについても書かれてあり、構造が違うから日本語のある一語を英語のある一語に対応させようとしてはいけないと筆者は言っていた。

「存在」という言葉も、**existence** という一つの言葉で対応させようとせずに、その言葉が持っている全体的な構造を理解することが重要である。

コメント [y20]: Existence は「実在」。物として存在していること。日本語と西洋語で特に大きな齟齬はない。「存在」の原語は being で、これには「実在」の意味と「属性を示す」という二つの意味がある。

近代哲学における典型的な「理解」の理論は、カントによって提唱されている。カントは『純粋理性批判』の中で、我々人間のすべてに対する「認識」のプロセスはどのようなものかを記した。カントはそもそも、人間は「物自体(Ding an sich)は認識できない」と記しているが、認識枠組みは「人類普遍」と考えていた。というのは、「認識」とは「感官(senses)」から始まり「悟性(understanding)」を経て、「理性(reason)」において終わるということだった。例えば人間があるモノを見た時に、そのモノの存在を「感官」で認識する。そしてそのモノが「何」であるかを確認する際に「悟性」を働かせる。それは「色」で確認したりするし、「形」で確認したりする。物理学的に考えると、「色」は人間によって作られた認識であり、実際に存在するものは波長なのであるが、人間は「色」という認識の規則を介してモノ、つまりは諸現象を統一する。更に人間はモノが「何」であるか認識した際に、そのモノで「何」をすべきかを「理性」を働かせて考える。この場合、「理性」は「悟性」の結果に関わるものであり、決して最初の経験ないしはなんらかの対象に関わるものではない。「理性」とは「悟性」との関わりによって初めて、諸現象をある「概念」として統一するのだ。この「認識」のプロセスにおいて、カントは「理性」を超えた人間の認識活動は見出すことはできないと記した。つまり直観から始まった人間の認識活動は、最終的に概念によって与えられたアприオリな統一において終わる (つまり、「自然法則」の認識によって完成するということですね)、とカントは記したということである。

上記の考え方は、カントの『純粋理性批判』によるものだが、その中でも超越論的弁証論について示したものである。「超越」を英訳すると Transcendental となり、あるものを「越える」という成り立ちから「卓越した、すぐれた」という意味となる。「弁証論」とは、ある問題について解決策を導き出すとき、人と人との「対話」によって真理を見出していく論じ方である。弁証論が古代から意識され続けていた中で、カントは超越論的弁証論という名のもとから、人間同士の議論を更に円滑に進める「考え方」を見出したのだ。つまりカントは人間一人一人が、「正しく理解する」ということはどういうことかを根本から考えることで、合理的に、理性的に議論を進める大切さを説いたのだ。このような考え方の下で「対話」によって真理を追求することは、今も昔も政治活動の根本において変わらない。

知性という意味のギリシア語のヌース(理性)は理解する力、作り出す力であり、ラテン語のインテクトゥス(理性)は理解する力であり、英語の understanding(悟性)は理解する力。理性という意味のギリシア語のロゴス、ラテン語のラチオは計算となる。悟性が規則を介して現象を統一する能力であるならば、理性は悟性規則を原理のものへ統一する能力である。理性が人間の活動で最高レベルだ。また、実在はわからず、私たちは appearance だけわかる。understanding で appearance を実現させる。出発点は人間の経験による。

哲学についての本は英語のほうが良い。日本語に翻訳されていると、逆に読みづらくなる。というわけで、これからは英語で(あるいはギリシア語、ラテン語、フランス語、ドイツ語で)読んでください。

今回の授業では、前回の授業に引き続き、「理性」のそもそもの意味について学んだ。ギリシア語の「ヌース」も「ロゴス」も、日本語では「理性」と訳される。しかし、「ヌース」はそもそも理解して何かを作り出す力という意味であり、「ロゴス」は計算するという意味である。同じ「理性」という言葉で訳されているも、そもそもの意味は異なる。

私たちの認識は、感官から始まり、悟性へと進み、最終的に理性へと進む。そして、理性が物事を理解する最も高次なものである。また、「悟性」が規則を介して諸現象を統一する能力だとすれば、「理性」は諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。その統一は「理性統一」と呼ばれ、悟性による統一とは全く異なる。

今回の授業は主に、原文の日本語訳と英訳を用いて進められたが、翻訳をするのが難しい場合もある。翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みであり、一言で置き換えるのが困難なときは、文章で説明をすれば理解可能になる場合がある。しかし、哲学用語は文章にすることが出来ないので、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることもある。

翻訳された文章を読む際、その翻訳は原文の意味をそのまま訳してあるものだと思っていた。しかし、切り捨てられてしまった意味もあるため、言葉の本当の意味を知るためには原文を読むべきだ。

まずは前回の復習から始まった。そもそも「知る」とはどういうことか。「知る」ということは世界について知る、ということである。つまり、知る力とは理性や知性、感覚のこ

とを指し、人間が世界を把握するための力である、と言える。また、世界は普遍的である、ということを証明していくこと (どちらかという、「世界が普遍的であることを前提としているの」) が哲学であるということも教わった。

次に、前回の学生コメントの返しに移った。ここでも主に前回の復習をした。まずは「知性」についての復習。ギリシア語で理性は「ヌース」という。「ヌース」は、理解する力、作り出す力、と訳される。ラテン語では理性を「インテレクトゥス」、英語では「Understanding」という。この2つを日本語の訳にすると「理解する力」となる。理性は「ロゴス」「ラチオ」と言われ「計算」と訳することができる。この「計算」とは、計算をすることで世界のすべての現象がわかる、という意味である。具体的に言うと、ロケットを飛ばす際に、どの角度だと一番遠くまで飛ぶかは、計算をすることで割り出せる、というようなことである。

以上のように、言葉の意味を具体的な例を交えて理解することによって、同じものを見ても見え方が変わってくるので、言葉について理解することは、哲学において大切である。

次に近代哲学における典型的な「理解」の理論について。このことについて 坂部恵さん カントは、「すべての認識は感覚器官から悟性へ進み、理性で終わる。また、直観から理性を超えたものは生まれません」と言った(カント『純粋理性批判』超越論的弁証論・序論、坂部恵『ヨーロッパ精神史入門』p133~134)。一言でいうと、理性を超えるものは存在しない、ということである。

では、悟性や理性とは具体的に何か。悟性は規則を介して諸現象を統一する能力である。例を挙げると、目の前に黄色いチョークがある。それを見て単に黄色いと思うのではなく、それに輪郭や名称といった情報を加えていき、チョークである、と規定していくことが挙げられる。理性は、諸悟性規則を原理のものへと統一する能力で、悟性に関わり多様な認識にアприオリな統一を概念によって与えるものである。つまり、概念という手段によって対象物を捕まえる、理解する、ということである。以上のことが西洋 近代 哲学の典型的な世界観である。

また、翻訳についても話があった。翻訳は、自分たちの使っている違った言語も同じ意味の自分たちの言語に置き換えようとするものである。一語で置き換えるのが困難なこともあるが、文章の流れから考えると大抵のものは理解が可能になる。しかしながら哲学用語の場合は文章にするわけにいかないの、元の言葉の意味の一部が切り捨てられてしまう場合がある。

意見

言葉の意味を理解して使っていくことは哲学に限らず多くの場面で大事なことである。例えば「役不足」という言葉を使う際に、本来は「自分にはもっといい役の方が適している」という意味であるのを知らずに、「力不足」のような使い方をしてしまったら、聞いている相手に誤解を招いてしまうからだ。

他にも、授業の中でもあったが、言葉ただ覚えるだけではなく意味を十分に理解するこ

とによって見えてくる景色が変わってくる。その具体例として歴史のある建造物を見る際に、その建物の歴史や背景を十分に理解することによって、その建物の見え方が変わってくる、ということが挙げられる。

このように言葉の意味を理解することは哲学に限らず多くの場面で大事になる。また、同じ景色でも、見えたものの厚みが変わってくるので、言葉の意味を十分に理解するということは大切である。

授業まとめ

今回の授業では理性について学んだ。

坂部恵さんの『ヨーロッパ精神学入門』によると、「認識は **understanding** から始まり、**reason** に終わるが、理性を越えるものはない」とある。具体的には「**understanding** が規則によって諸原理を統一する能力であるとすれば、**reason** は、諸悟性規則。原理のものへと統一する能力である」とされている。

次に、翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みである。一語で置き換えることが難しいこともあるが、文章で説明することで理解できる。しかし、哲学の用語は文章にはできないので、元の言葉の一部が切り捨てられることになる。たとえば「存在」という語は、英語では **being** であり、**be** 動詞の意味は存在(**existence**)と「～だ」(繋辞の **coupla**)があるが、日本語の存在という語は一方しか訳されていない。哲学の主要なモチーフの一つである「存在論 **Ontology**」が、日本語では理解しがたい原因の一つでもある。

意見

翻訳では、意味をいつ切り捨てたり文章にしたりすることで意味がずれることもあるので文脈から読み取らなければならない。それは意味がずれることがあっても、文法があるので少し意味を取り違えてもだいたいの予測はつくからだ。

コメント [y21]: 原文を確認の方が正確です。

今回の講義は、主に哲学の翻訳についてだった。英語と日本語訳を比較すると、そのまま訳されていることが多い。しかし翻訳は難しく、哲学用語であると、元の言葉の意味の一部が切り捨てられる事もある。

今回の講義について疑問に思ったことは、レジメ 2 枚目の「**哲学用語**だと、文章にするわけにもいかない」という部分である。翻訳は同じ意味の言葉を別の言語で表すことだが、哲学用語の場合だと元の言葉の意味が切り捨てられると書かれている。翻訳をする点で大事なのは別の言語に置き換えていくなかで間違った意味に翻訳しないようにする事だと私は考えており、元の言葉の意味を切り捨ててしまうと意味が変わってくるように感じる。

コメント [y22]: ある概念を示す「用語」を作っていくことが、学問では求められます。学問の体系とは、ある意味では「用語の体系」でもあります。なので、外国語の単語を、日本語の単語に訳さないわけにはいかないのです。

それならば多少長くなってしまってもひとつの単語をわかりやすいように文章で記していく方が正しく意味が取れるのではないのだろうか。この点について疑問に思った。

ヌースの訳としての「理性」と、ロゴスの訳としての「理性」は異なる。同じ言葉であろうとも時代背景や国によって意味が異なっており、そもそもの意味を理解することで、哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことが重要なのである。たとえば、「存在」とはギリシア語では、「オン」ないし「ウーシア」=ギリシア語の Be 動詞の名詞形であるが、英語だと Being であり、「存在」では半分しか訳されていない。それだけ翻訳は困難であることが分かる。

近代哲学における典型的な「理解」の理論はカントの『純粹理性批判』によると、「われわれの全ての認識は感官から始まり、そこから悟性へと進み、理性において終わるが、理性を超えては、直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらすべきより高次のは、何一つとして我々の内には見出されない」とある。悟性や理性とは具体的には「悟性」が規則を介して諸現象を統一する能力であるとすれば、「理性」は、諸悟性規則を原理のものへと統一する能力のことだ。

ロゴスとしての理性は、計算。ヌースとしての理性は理解する力、作り出す力。

カントによると概念は思考の中にある。デカルトによると、モノの本質は広がり、「体積」である。

悟性は規則を介して諸現象を統一する能力であり、理性は、その諸悟性規則を原理のものへ統一する能力である。また、感覚は物そのものではなく、感覚から概念を抽象するのである。

哲学用語を翻訳するのは難しい。なぜなら文章で説明できるが一語で置き換えるのは難しく、文章の場合だと一部意味が切り捨てられてしまうことがあるからだ。翻訳すると微妙なニュアンスを表現するのが難しいのだ。

今回の授業は前回の授業の内容を再確認した後、悟性や理性とは具体的にはどういうことかということ学んだ。前回の内容はヌースの訳としての「理性」と、ロゴスの訳としての「理性」は異なるということが要点であった。今回は理性とは具体的にどのようなものか理解することが重要である。理性がどのようなものか理解することで自分の理解し考

える力がつけることが出来る。理解し考える力を持つことは、これから自分で判断しなければいけない状況になったときに備えることでもある。このことは非常に重要である。以上のことが今回の授業の要点である。

今回の授業では、理性は具体的には、規則を原理へ統一する能力であること、**reason** は中心世界を持つ理性であるということ学んだ。また、哲学を学ぶとき、いくら日本語訳を読んでもあまりピンとこない、理解しづらいのは同じ「理性」でも少し異なる意味の日本語訳であることがあるので、原文のままを、読んだ方が理解しやすいと学んだ。授業でさえも用語を覚えて理解していないと、内容が理解できないことがあるので、用語を覚えることは大事である。

前回の授業内容も踏まえた言葉の意味について。

ヌースの日本語に訳すと理性であり、理解する力、作り出す力という意味がある。しかし、同じ理性と訳すインテレクトゥスは理解する力という意味しかない。このように、同じ理性でも意味が異なる。知性、理性、悟性など、哲学上の基本概念を正しく理解することが重要である。

また、近代哲学における哲学的な「理解」の理論について学習した。カントの『純粹理性批判』によると、我々のすべての認識は感官から始まり、そこから悟性→理性へと進み、理性において終わる。しかし、理性を超えては、直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらすべきより高次のものは、何一つとしてわれわれのうちには見いだされないという。具体的に悟性や理性とは、悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとすれば、理性は、諸悟性規則を原理のものへと統一する能力である。それゆえ、理性は悟性にかかわり、悟性の多様な認識にアプリアリな統一を概念によって与える。決して最初の経験や何らかの対象にかかわるのではない。

多くの英語やラテン語、ギリシア語が日本語に翻訳されてきたが、他言語を同じ意味で自国の言葉で適しているものに翻訳は難しいことである。一語で置き換えることが困難な場合もあるが、その場合文章で説明すればたいてい理解可能になる。しかし、哲学用語を文章にするわけにもいかず、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。

他言語を正しく理解するためには、本来の意味を切り捨てるのではなく、あくまで本来の意味に自国の言葉を合わせるべきである。一言語で無理なら文章で、文章で無理なら図や表を用いるなど本来の意味を損なわない工夫が必要だろう。

前回の要点

知性、理性、悟性など、哲学上の基礎概念を正しく理解することが目的であった。そのために、どちらも日本語では「理性」と訳すヌースとロゴスという二つの語の意味の異なりを理解する必要がある。前者のヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出すという意味であるが、後者のロゴスは説得や論証の手段である。このように、同じ役であるが意味には大きな違いがある。

日本語訳と英語訳の意味の違い

日本語訳と英語訳にはずれが生じる場合がある。例えば、近代哲学における典型的な「理解」の理論の英訳と和訳の違いである。日本語訳では「われわれのすべての認識は感官から始まり、そこから悟性(Verstand)へと進み、理性(Vernunft)において終わるが、理性を越えては、直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらすべきより高次のもは、何一つとしてわれわれのうちには見いだされない」。カント『純粹理性批判』超越論的弁証論・序論(坂部恵『ヨーロッパ精神史入門』pp.133-134)であるが英語訳では「All our knowledge starts with the senses, proceeds from thence to understanding, and ends with reason, beyond which there is no higher faculty to be found in us for elaborating the matter of intuition and bringing it under the highest unity of thought.(By Norman Kemp-Smith 1929)となっている。これでは、understanding がカント以前から持っていたもう一つの「知性」という意味を省略してしまっている。

もう一つ上げるなら悟性と理性は具体的にはどんなものなのかを見たとき、日本語訳では「悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとするれば、理性は、諸悟性規則を原理のものへと統一する能力である。理性は、それゆえ、決して最初の経験ないしはなんらかの対象に関わるのではなく、悟性に関わり、かくして、悟性の多様な認識にアプリアリな統一を概念によって与えるのであるが、このアプリアリな統一は理性統一と呼ばれてよく、それはまた、悟性によって遂行される統一とはまったく別種のものである。」となるが英語訳では「Understanding may be regarded as a faculty which secures the unity of appearances by means of rules, and reason as being the faculty which secures the unity of the rules of understanding under principles. Accordingly, reason never applies itself directly to experience or to any object, but to understanding, in order to give to the manifold knowledge of the latter an a priori unity by means of concepts, a unity which may be called the unity of reason, and which is quite different in kind from any unity that can be accomplished by the understanding.」となっている。この文では understanding と reason が、~~intellectus~~ と ratio からきれいに逆転してしまっている。

これらの事例から、同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているが、そもそもの意味を理解することで、哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことが重要であ

コメント [y23]: カント自身が、以前からの Intellectus とはことなった意味で(むしろ Ratio が持っていた意味で) Vernunft を使っている。

る。そもそも、翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みである。その翻訳では一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいていの場合は理解可能になる。しかし、哲学用語だと、文章にするわけにもいかないのが、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。

今回の授業は翻訳とは「同じ意味を別の言語に移そうという試み」であってヌースという言葉も、ほかの言語に翻訳されていくうちに本来持っていた「何かを工夫して作り出す」という意味が消えて「理解する力」として伝わっていったこと。そして、ロゴスとラチオが計算という意味を持っていて、計算が違くと現実を怪しみだすといったようなこともあるが、世界が常に計算に従うわけではなく、論理のほうが上位にあること。そして我々は理解の際にそれぞれの種類ごとに概念区分をするが、哲学者がその概念区分の前提にあるものを探していることを学んだ。

前回学んだ悟性や理性といった言葉のもつ具体的な意味や、それが哲学で用いられる場合の使い方について学んだ。

正直今回の講義内容は複雑すぎてあまり理解ができなかった。

哲学者たちはどうしてあのように回りくどい手法で自らの考えや言葉の説明をするのであろうか。

もちろん哲学が感覚的に物事を捉えるのがご法度だというのはこれまでの講義で理解しているつもりですが、さすがに回りくどすぎると感じました。

私は多少感覚的に捉え噛み砕いた表現でも後世に自らの考えを「広く」伝え、多くの人に知ってもらう方が哲学という学問の繁栄につながると考えますがそうではないのでしょうか。

なぜ、先人たちはもう少しわかりやすく具体的な表現を用いてくれないのでしょうか。それとも私が学がないだけなのでしょうか。

ヌースとロゴスはどちらも理性と訳されるが、ヌースは理解する力であり、ロゴスは計算であるので意味が異なる。また、元々の「理解」の理論は、センスから入りラチオ(理性)、インテレクト(知性)につながるものであった。つまり、知性は理性の上に位置づけられていた。だが、カントは『純粋理性批判』で、感覚は物そのものではないので、understanding

コメント [y24]: 具体的にどのような手法なのか説明してください。

に通すことで形を持ち、理解は understanding(知性)、reason(理性)へとつながるものであると説いた。ここでの、understanding は、感覚に対して輪郭を与え、概念を規定することで、reason は規定された概念を統一することである。近代哲学において、理性と知性の位置づけの逆転が起こった。また、概念によって与えられる統一と悟性によって遂行される統一は別である。

人間の知識は見えてわかる直観から始まり、概念は思考によって統一される。よく、直観を鍛える、直観を信じるという言葉が聞かれるが、知識は直観から始まるので、その言葉が言われる意味が分かる。また、知識をつけておくことも大切である。知識があれば、より正確に統一することができる。また、個々の事物は実際に存在するが、自然法則は存在しない。自然法則は自身の経験や知識から自然に身に着いているものである。経験を積むことは重要である。

コメント [y25]: どんな意味ですか？

コメント [y26]: 自然法則は、感覚→悟性→理性の順に思考していくことで把握されるものです。

知性というのは、ヌース:理解する力。作り出す力。インテレクトゥス:理解する力。Understanding:理解する力。である。理性というのは、ロゴス:計算。ラチオ:計算。である。ヌースの訳としての理性とロゴスの訳としての理性は異なる。近代哲学における典型的な「理解」の理論では、人間の思考において、理性よりも高い機能は存在しない。物を考えるときの前提は概念区分で理解することである。概念区分というのは、例えば「食べ物」や「動物」といったものである。「人間」の場合、一人一人は存在するが「人間」という概念そのものは存在しないのである。このように、概念は個物とは関係ない。

コメント [y27]: 「関係ない」は言い過ぎ。

翻訳することは難しい。国それぞれでぴったりハマった訳があるとは限らないからである。それでも、一語で置きかえようとすれば難しいが、文章にするとたいがい理解可能になる。哲学用語は、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることもある。

今回の授業は「理解」についての話だった。

英語では悟性は Understanding という言葉であり、「理解する力」の意味がある。悟性は現象を理解し、秩序を与える。またその現象には、英語では Reason という言葉である理性が統一を与える。これによって、対象への抽象概念をひとまとめにし、そのすべてに当てはまる結論が出される。

Understanding と Reason の関係は Intellectus と Ratio の関係から逆転している、とレジュメにある。Intellectus とは何を推論すべきかを判断する能力を含むが、これが Reason にも含まれる。Ratio には、think、deem、judge などの意味があり、これは Understanding に通ずるところがある。

言語から言語へ翻訳される過程と年月を経て用語は変遷してきたが、大意は変わっていない。文章化に際して区別する必要があるが、悟性と理性は似通った意味を持っていて、上記したような「理解」に関する一連の流れは解りにくかった。

意志表明型にはなるが、今の不明瞭な認識を改めるため、今後時間を取って「理解」について調べたい。

コメント [y28]: 具体的にどの点がわかって、どの点がどうしてわからなかったのか特定するようにしてください。そうでないと、調べようもありません。

前回の授業は知性、理性、悟性など、哲学上の基本概念を正しく理解することが目的であり、ヌースの訳としての「理性」(理解する力、作り出す力)と、ロゴスの訳としての「理性」(計算)は異なるということを学んだ。悟性や理性を具体的に言うと、悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとするれば、理性は諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。英訳された文章を見てみると、understand と reason が、intellectus と ratio からきれいに逆転していることがわかる。

また、翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みである。一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいていの場合理解することが可能になる。たとえば、「存在」という言葉は、ギリシア語では「オン」や「ウーシア」、英語では「Being」となる。

今回の授業では前回に引き続き知性、理性、悟性について学んだ。前回は知性や理性の言葉の意味を習ったが、それだけではなくそれらの持つ哲学上の基本概念を正しく理解することが重要。理性はヌースとロゴスの両方の訳に含まれている。しかしヌースの訳としての「理性」は理解する力、作り出す力といった知性や悟性的な意味合いを持つもの。ロゴスの訳としての「理性」はラテン語のラチオと同様に計算の意味を持つ。これは、デカルトが世界は空間的な広がりによってのみ構成されておりすべて幾何学で処理できるとし、彼の時代以降理論物理学を用いた計算によってすべてが分かるという考えが生まれたことがもとになっている。このようにヌースとロゴスの訳に含まれている「理性」の意味は異なる。

言葉の意味を見的过程中で、翻訳の間で意味が変化しているものがある。翻訳は「同じ意味を別の言語に移そう」という試みであり、複数の意味を持つ単語もあるため一語で置き換えることが困難な場合もある。だが、文章で説明すればたいてい理解可能になる。しかし、哲学用語は文章にするわけにもいかないので元の言葉の意味の一部が切り捨てられることもある。「存在論:Ontology」が日本語では理解しがたい原因の一つはここにある。「存在」はぎではギリシャ語の Be 動詞の名詞形である。英語だと Being だが、Be 動詞の意味は存

在(実在 Existence)と「~だ」なので「存在」では半分しか訳されていないからだ。

また今回は近代的な哲学における典型的な「理解」についてカントの考えをもとに学んだ。まず私たち人間はモノを認識する際、感覚から始まりそこから悟性に進み理性において終わる。しかし人は真の実在を見ることができない。これはプラトンのイデア論的考えだが実際私たちは感覚器官によって得た情報を頭で理解しているに過ぎないので感覚と実在は同一ではない。だが私たちは理性の働きによってモノを認識するときその対象が持つ概念を感じ取っている。悟性の多様な認識に概念によって統一を与える理性は具体体験に関わるものではない。

今回の講義では、悟性「understanding」と理性「reason」が逆転していることを中心に学んだ。本来は、感覚器官から理性、悟性へと動いていくが、カントの考え方では、理性と悟性が逆転している。理性は、悟性にかかわり、統一を概念によって与えると書かれていた。また、「存在」はギリシア語で「オン」や「ウーシア」と訳されており、英語では「being」と訳されている。そのため、「存在論」は「being 論」と呼ばれている。このように翻訳される際には、基本的に意味は同じになるということも知った。

講義の中で出てきた「抽象概念-感覚と物理現象の違い」についての例として赤外線と紫外線が挙げられた。これらは色として表されると赤と紫であり変わらないが、電磁波としての波数では大きな差がある。しかし、人は色を重視している。その理由として、私は視覚情報を重視しているからだと考える。電磁波は目に見えないので、人間としては身近に感じにくい。色であれば、明確にわかるのでそのように認識していると私は考える。

コメント [y29]: どういう意味ですか？

今回の授業では、理解し考える力として悟性と理性について学習した。近代哲学における典型的な「理解」に理論として、カントの超越論的弁証論・序論とした。超越論的なものはトランセンデンタルとして、概念区別の区分はどうやって作られたのかという、概念区分の前となるものとした。そして、理性とは人間の認識活動における最高の機能ということを学習した。また、あるものの存在で具体的な対象が実在するのではなく、概念として思考の中に存在するという。つまり、個々の個別の法則はあるが、すべての現象はいくつかの自然法則に基づいている。

それから、人間はモノを見るときにまずそのモノの色を理解する。これからまず、哲学の Understanding が働き、その役割は単なる色として捉えるのではなく、輪郭を与え、名前を付けるということである。その次に Understanding から現実へ、理性へと繋がっていく。私たちはその輪郭に幅を持たせている。例として、円の輪郭の幅はどれくらいなのか

とか、きっちりと正確な円は実在しないが、私は円について理解している。また、本物の三角形は実在しないが、三角形の公式を当てはめて証明をすれば、全ての三角形に当てはまる。その行程として、先ほど輪郭まで与えられたモノは、統一化が図られ同じものが見つけられ、理解して作り上げられた Unity、抽象概念となり、最終的に Reason(理性)となる。

我々が知る事の出来ない真の実在がある。その一方で、我々は物を概念で捉え、さらに概念で捉えたものを同じ物で捉えている。

今回の授業は、前回の続きとして近代哲学において、「理解」とはどう理論づけられているか、悟性と理性について。そしてアリストテレスの「能動知性」についての授業であった。主に前回の授業コメントから、大切なことを掘り下げながら行われた。

悟性、理性とは近代哲学(カント)では具体的にどのようなことを言うのか。授業では悟性は「規則を介して諸現象を統一する能力」であり、理性は「諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力」であると学んだ。私たちのすべての認識は感覚器官から始まり、そこから悟性、理性と進んでいく。この世のすべての現象は自然法則に基づいて起こっており、カントはそのための概念などは思考の中にあると考えた。我々人間がもつ認識能力である悟性は一般的にカントが提唱した意味となっている。

規則を介して、諸現象を統一することが悟性であり、その先に理性があるため、ある一つのものに対しての理性というのは我々の中で共通のものとして認識できるただ一つの概念となる。悟性という段階では、ある一人の感覚から感じたものにすぎないため、他人と違いがあることがある。悟性と理性はしばしば同じような意味で間違った使い方をされることがあるが、その二つの言葉にははっきりと全く違う意味が宿っているのである。

カントはわざわざ悟性という、アприオリな統一を概念に与えた。理性は具体的な経験にはかかわらず、悟性はこれまでの経験などからもたらされるものだ。カント哲学の基本概念的「物自体」という、ある現象は我々の認識の主観で構成されるとするカント哲学の基本概念的を考えると、現象の統一を「悟性と理性」の二つに分解して考えることは、近代哲学の基本的概念を理解する上で重要である。

コメント [y30]: どういう意味ですか？

今回の講義では最初に前回の講義のまとめがあった。知性、理性、悟性といった哲学上の基本疑念を正しく理解することが大切である。

西洋哲学を読むときは原文を日本語訳で読むよりも、英語で読んだ方が分かりやすい。カントは西洋哲学の世界観の典型例を示した人物である。カントによると、理性は人間の

認識活動における最も高いものであるとされ、我々の知識は目で見て分かるものから始まり、概念的な統一感をもたらす。様々な個別現象はいくつかの自然法則に従って生じる。つまり、カントによる西洋哲学の世界観の典型例とは、ものの実在は分からないが、私たちは感覚によって得られたアペアランスを **understand** するということである。

また、日本語なら同じ言葉であっても、英語なら異なるものになることがある。例えば **concept, notion, idea** という単語は日本語では「概念」とひとくりにされるが、英語ではそれぞれ異なるものを示す。翻訳は「同じ意味を別の言葉に移そう」という試みである。しかし哲学用語は文章で説明するわけにもいかないで元の言葉の意味を忠実に移せない可能性がある。よって哲学を本格的に学ぶなら原文で読むべきである。

コメント [y31]: 具体的にそれぞれどういう意味ですか？

カントは、感覚によるものは、真の理解ではなく、**appearance**(見かけ)にすぎないと提唱した。具体的な感覚に対して、**understanding** で定義づけることでその概念に秩序を与え、抽象概念にする。このとき、抽象概念は個物とはみなされない。そして、抽象概念を **reason** でまとめると普遍的な概念と結論付けられるということが分かった。

「翻訳はできない」と述べられることがあるが、実際には、訳せないことはない。それは、人類は出発点が等しく、基本的に類似した経験をしているためである。しかし、**apriori idea, concept, notion** は、日本語訳にすると、すべて概念と訳されるが、英語では、全く意味が異なる。**(apriori は、必然的という意味を含み論理的に先立つという意味)**、**concept** は一緒に捕まえる、その中に入っているという意味で、**notion** は、簡潔な記述という意味であると学んだ。また、存在論は、**being** の訳語だと訳されるが、英語の **being** は、**exist**(存在)、**quality**(属性)、という意味を含むが、日本語では、存在論と訳されているため、**quality** の意味が消えてしまっている。このように訳すときに、意味の一部が切り捨てられているため、意味は少しずつ変わっていく。

同じ言葉でも時代や国によって意味や指し示すものが違うが、哲学においてはその言葉が持つ本当の意味を見出すことが重要である。それはヌースの訳としての理性とロゴスの訳としての理性が同じではないことからいえる。また、例として「存在」はギリシャ語ではギリシャ語の **be** 動詞の名詞形としてとして扱われているのに対し英語では **being** つまり存在を意味し半分の意味しか表されていないことから分かる。

カントの「純粋理性批判」では「理性を越え出せば、直感の素材を加工してそれを最高の統一にもたらすべきより高次のものは、何一つとしてわれわれの内には見出されない。」とある。具体的に悟性とは規則を通して諸原理を統一する能力であり、理性は諸悟性規則

を原理のもとへと統一する能力である。具体的にどういうことか分かりましたか？

哲学の用語は、目で見てさわれるもの、具体的に知覚できるものから始まり抽象的な難しい言葉になっていく。また理解は、全ての認識は感覚から始まり、悟性が規則を介して諸現象を統一する能力である。理性は具体的なものとは関わらない。ヌースの理性とロゴスの理性は異なる。物理の世界では、現実と計算が異なると理屈に合わせて現実をいじっている。この考え方は哲学からきた発想であり、デカルトは図形を式にすることで全てを計算で表すことができるようになり前記の現代物理学に繋がっている。また、どんな言語であっても始まりは同じで大体の言葉は文章で翻訳可能。ただ哲学では一つ一つ文章にする訳にも行かないので、意味が1部切り捨てられることもある。以上が授業のまとめである。

授業のなかで、紙に「チョーク」と名前をつけてもチョークにはならないとあった。しかし社会学で主観的現実について学んだ時に、傘に「もげ」と名付けて呼び続けると傘は「もげ」になるとあり、つまり名前は単なる主観的現実だとあった。この2つがどうして一見まったく違うようになるかがわからない。学問は違うが、認識が誤っていればさらなる混乱が予想され理解の妨げになるので是非知りたい。

予想

おそらく山口先生の言っている、紙がチョークにはならないとは概念の話で、社会学の方は名前だけに焦点をおいたものである。哲学と社会学真っ向から反対するものではないので、このように予想した。

コメント [y32]: 概念とは人間が考えたもの(心の中にあるもの)。物として、紙はチョークにならないでしょう、という話でした。

コメント [y33]: それはそのとおりでしょう。

今回の授業では近代哲学における典型的な「理解」の理論と翻訳の難しさなどの話がされていた。

まず、前回の授業の復習としてヌース(理性)は理解する力。作り出す力。考える力。ロゴス(理性)計算。この二つの訳としての「理性」は異なるという事が前回の授業の論点だったという事が分かった。

次に、近代哲学における典型的な「理解」の理論の説明です。我々の認識は感覚(sense)から始まり、そこから悟性(understanding)へと進み、理性(reason)によって終わるが、理性を超えて、直観で得たものを加工しそれを最高の統一にもたらずことよりも高次のものは

何一つ作り出せない。というのが近代哲学における典型的な「理解」の理論であることが分かった。(しかし難しい授業であったので私のこの解釈があっているのかは判断できない。)

最後に、翻訳の難しさの話だ。翻訳とは同じ意味を別の言語に移そうという試みのことである。ただ、哲学用語だと例えば「存在」という言葉もギリシャ語では、「オン」または「ウーシア」=ギリシャ語の **Be** 同時の名詞系。英語では **Being**。意味存在と「~だ」。このように「存在」では半分しか訳されていないことがあるということが分かった。

ロゴスとは説得や論証の手段という意味で、**Reckon, count, tell** と訳すことができる。具体的には、ソフィストの説得術や、プラトンのディアレクティケーという弁証術があげられる。ヌースとは、理性に基づいて何かを作り出すという意味で、**discern, purpose, intend** と訳すことができる。特に日本語では、理性という言葉で訳されることが多い。また、ラテン語の **intellectus** はそもそも **perceive, discern, recognize** という意味で、英語では **Understanding** と訳される。

このように、多くの言葉が入り混じっているのは、人間が世界を理解するうえで力となるものであり、どれも目的をもって意図されているのだ。文章で説明すれば何となく理解することができるものである。私は、前回の講義を受けた時点では、なぜこんなにも訳語でややこしくしているのか理解できなかったが、今回の講義で、これらの重要性が分かった。基本的な部分である出発点は人間の経験であるから皆同じである。だから、哲学用語は難しそうに思えても、なんとなくいけるものだ。ただ、元の言葉の意味が切り捨てられてしまうことがあるのがややこしくしている原因の一つではある。あまり深く考えすぎず、訳語を整理して哲学を学んでいくことで、共通のものが見えてくるのである。

今回の授業では、近代哲学における「理解」について学んだ。私たちの「認識」は感覚から悟性、理性へと進んでいく。だが、それを越えて直観というものがある。また、これらのことを日本語訳と英文で読んだ。悟性や理性についても、日本語文と英文で読み、学んだ。

今回の授業では、認識は見えるもの感覚から始まり、直観で認識し、それを概念でくくるとカントは考えた。先生はおっしゃっていたが、生まれつき目の見えない人の認識はどこから始まり、どのように概念でくくられるのか。

これは、人との対話や、視覚以外の五感から目の見えない人独特の視覚情報を抜きにした認識がうまれるのではないか。例えば、犬と猫を視覚抜きで認識しようとするれば、耳や

コメント [y34]: どういう意味ですか？

コメント [y35]: 分かった内容を具体的に説明してください。

コメント [y36]: 人間には目以外の感覚もあります。もしもすべての感覚が機能していない人がいるとすれば、その人は何らの認識も得ないでしょう。

尻尾の形は見えないし、触った感触はどちらも毛むくじやらでふわふわであり、どちらが犬か分からない。だが、「ワン」と鳴けば犬であり、「ニャー」と鳴けば猫である。という聴覚に関連する情報を知っていれば、判別できる。このようにして、目の見えない人はものを認識している。

近代哲学における典型的な理解の理論は五感から始まり理性でおわるが、理性を越えてそれを越えてより高次なことは自分たちのうちには何一つ見出されない。

悟性や理性とは具体的にいうと、悟性が理性を介して諸現象を統一する能力であるとするれば、理性は諸悟性規則を原理のものへと統一する能力である。理性において遂行される統一は悟性における統一とは全くの別種のものである。

翻訳は同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているが、そもその意味を理解することが大切である。哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことが重要である。翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みであり、一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいてい理解可能になる。だが、哲学用語だと文章にするわけにもいかないで、元の言葉の意味の一部が切り捨てられる。たとえば、「存在」をギリシア語で表すと「オン:ov」ないし「ウーシア: Οὐσία」だが英語だと Being といった具合だ。

理論的知識は、その対象と同一である。

この哲学の授業をうけてニュースなどを見る時、以前は情報を鵜呑みにしたりしていたが、なぜそのような報道をするのかなど、そのニュースが伝えたいことなどを考えるようになった。また人の言うことも自分なりに深く以前より考えられるようになった。これからも哲学の様々な考え方を生活に活かしていきたい。

コメント [y37]: この授業のどういう部分からそのように学んだのか、説明してください。

今日の講義では、前回の講義の学生からのコメントを中心に学んだ。

近代哲学ではデカルトとカントが二大巨塔である。

デカルトは計算万能主義で、「世界の何でも計算できる」と主張し、計算の結果と現実が異なっていれば、現実が間違っていると主張した。

前回の講義で「understanding」はギリシア語で「ヌース」、ラテン語で「インテレクトゥス」というふうに学んだ。

その「understanding」は感覚に対して輪郭を与えて名前を与える。

「understanding」から原理に至るのが「reason」である。

「reason」はギリシア語で「ロゴス」、ラテン語で「ラチオ」である。

また、カントはその著書である『純粋理性批判』の中で、「われわれのすべての認識は感官に始まる」と述べている。

次に、悟性と理性について具体的に区別して述べる。悟性は規則を介して諸現象を統一する能力である。理性は、諸語性規則を原理のもとへと統一する能力である。

また、翻訳について意見を述べている学生もいた。

翻訳とは、同じ言葉を別の言葉に移そうという試みである。

言葉を置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいていの言葉は置き換えることができる。しかし、哲学用語を翻訳するときには文章にするわけにもいれない。そのときには元の言葉の意味の一部が切り捨てられることになる。

翻訳については、20世紀に翻訳はできないという説も主張されていた。

記述がいささか断片的です。ひとまとまりの文章になるように書いてみましょう。

今回の授業では、哲学用語の言葉の意味、「理解」の理論について、悟性や理性について、哲学用語の翻訳について学んだ。

まず、哲学用語の言葉の意味についてだが、これは前回の授業の復習だった。ヌースの訳としての「理性」は、ただ単に考えるのではなく、目的や意図を考え、想像したり工夫したりして何かを作り出す力のことである。一方、ロゴスの訳としての「理性」は、計算の意味があり、それぞれ「理性」と日本語に訳されているが、本来の意味は異なるというところが重要である。

次に、近代哲学における「理解」の理論についてだが、すべての認識は感覚器官で享受し、悟性に進み、理性で終わるというのはわかったが、そのあとの「理性を越え出せば、直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらしべきより高次のものは、何一つとしてわれわれのうちには見いだされない」というところの自分の理解があっているかわからない。先生が授業中に示した例がチョークについてだったので、チョークを例にする。ものにはそれぞれ概念があり、その区分によって判断されており、チョークはチョークという概念によって認識されている。しかし、その概念を抜きにしてチョークを見ると、チョークというものとしては認識することができないと理解した。

次に、悟性や理性についてだが、カントによると、悟性が諸現象を統一する能力ならば、理性は悟性によって統一されたものを原理として統一する能力であり、悟性による統一とは異なる。悟性はもの自体に関係しており、感性によって認識したものを統一して考え、抽象化する。一方、理性は、もの自体は関係なく、悟性によって抽象化されたものを普遍的な概念として統一させる。悟性による統一は多様であるが、理性による統一は論理的で必然的なものであるという点で異なっている。

次に、哲学用語の翻訳についてだが、人間の基本的な経験は一緒であるがゆえに、翻訳

ができて言葉の意味も文章で説明すればたいてい理解できる。ただし、英語の **Being** は「存在」という意味と「~だ」という意味があるが、「存在」という意味で訳されると半分しか訳されていないことになる。このように哲学用語を翻訳しようとするとき元の言葉の意味の一部が切り捨てられてしまうものもある。「理性」と訳された言葉もいくつもあるが、それらの言葉はそれぞれ意味が違っているにもかかわらず、言葉の意味がすべて表されていない。そのため、翻訳した意味でそのまま理解してしまつては間違つた解釈を起こしてしまう。このようなことがあるため、言葉の本来の意味を理解しておくことは重要である。

近代哲学における典型的な「理解」の理念において、われわれすべての認識は感官から始まりそこか悟性 **Verstand** へと進み、理性 **Vernunft** において終わるが、理性を超えて出るとは、直感の素材を加工してそれを最高の統一にしなければ、何一つとしてわれわれのうちには見出せないのである。

悟性や理性とは具体的にいうと、悟性が理性を介して諸現象を統一する能力であるとするれば、理性は諸悟性規則を原理のものへと統一する能力である。理性において遂行される統一は悟性における統一とは全くの別種のものである。

また翻訳は難しいものである。同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているが、そもそもの意味を理解することが大切である。哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことが重要である。翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みであり、一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいてい理解可能になる。だが、哲学用語だと文章にするわけにもいかないのが、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。たとえば、「存在」をギリシア語で表すと「オン:ov」ないし「ウーシア:Οὐσία」だが英語だと **Being**。これによると **Be** 動詞の意味は半分しか訳されていない。

現実態にある理論的知識は、その対象と同一である。が、可能態にある理論的知識は、一人の人間においては、時間的により先なるものである。だから一方で、人類全体としては時間的にも、ある時には思惟し、ある時には思惟しないということはない。分離されているときに、まさにそれであるところのものであり、それだけが不死で永遠である。

前回の授業では、知性、理性、悟性など、哲学上の基本概念を正しく理解することが目的であった。ヌースの訳としての「理性」とロゴスの訳としての「理性」は異なり、ヌースが理解し、理解に基づいて何かを作り出す力を意味するのに対して、ロゴスは説得や論証の手段、計算を意味した。

コメント [y38]: ここはまだ取りあげていません。

カントの『純粹理性批判』超越論的弁証論・序論(坂部恵『ヨーロッパ精神史入門』)によると、われわれのすべての認識は感官から始まり、そこから悟性(Verstand)へと進み、理性(Vernunft)において終わるが、理性を越えては、直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらしべきより高次のものは、何一つとしてわれわれのうちには見いだされないとされる。

これを英訳すると、All our knowledge starts with the senses, proceeds from thence to understanding, and ends with reason, beyond which there is no higher faculty to be found in us for elaborating the matter of intuition and bringing it under the highest unity of thought となる。

悟性や理性とは具体的には、悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとするれば、理性は、諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。理性は、それゆえ、決して最初の経験ないしはなんらかの対象にかかわるのではなく、悟性にかかわり、かくして悟性の多様な認識にアプリアリな統一を概念によって与えるのであるが、このアプリアリな統一は理性統一と呼ばれてよく、それはまた、悟性によって遂行される統一とはまったく別種のものである。

英訳では、Understanding may be regarded as a faculty which secures the unity of appearances by means of rules, and reason as being the faculty which secures the unity of the rules of understanding under principles. Accordingly, reason never applies itself directly to experience or to any object, but to understanding, in order to give to the manifold knowledge of the latter an a priori unity by means of concepts, a unity which may be called the unity of reason, and which is quite different in kind from any unity that can be accomplished by the understanding となる。

二つの英訳を比較するとにおいて、understand と reason の役割が、古代ギリシア哲学から中世哲学における intellectus と ratio から逆転している。

翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みで、一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいてい理解可能になる。しかし、哲学用語だと、文章にするわけにもいかないのが、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。

先生が、「赤を説明できない」という例を出したときに、(これは、すべての認識は感覚から始まることの例)、私たちのものの認識の仕方が理解できた。物理的に存在しているのは ~~デジジャー=電磁波~~ であるが、色を見てしまう。感覚はものそのものではない。

近代哲学における典型的な「理解」の理論は、カントによるものである。これは、私たちの認識は感覚から始まり、そこから悟性へと進み、理性において終わるが、この統一より高次のものはないということだ。悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとする

れば、理性は諸悟性規則を原理のものへと統一する能力である。理性は悟性にかかわり、悟性の多様な認識にアプリアリな統一を概念によって与える。しかし、このアプリアリな統一は理性統一と呼ばれ、悟性による統一とはまったくの別種である。

翻訳とは「同じ意味を別の言語に移そう」という試みである。一語で書き換えようとすると困難な場合もあるが、文章で説明するとたいいていのが説明できる。しかし、哲学用語の場合は文章で説明することができないため、元の言葉の意味の一部が切り捨てられる。

本日は、悟性と理性という基本概念を学んだ。知性と合わせてこれらは、ものとしてそれぞれ違っているものも同じものとする妥当な理解をする力である。しかし、知性はヌース、インテレクトゥス、understand とされ、理性はロゴス、ラチオとされるように区別される。(理性中心主義とは、デカルトの論理と現実を比べて論理を偉いとする思想に代表される。デカルトは、すべてを説明しようとしたアリストテレスに対し、ものは図形でできている計算によって分析できるとした。)

次にカントの『純粹理性批判』に基づいて悟性と理性を見た。ここで超越論とは、時間や量などの日常的概念区分を trans(超える)し、cendental(上る)したうえでの認識である。カントはモノとして存在するが、その概念(イデア)は存在しないとされた。そのため、私たちが見るものは、真の存在ではなく、あくまで諸現象であり、悟性によってものと規定される。また、悟性は理性のはたらきで、概念を置くことで、原理となり普遍的な結論となる。その結論が最高の統一とされた自然法則であり、カントはそれが思考にあると答えた。

ここで、カントの思想において「understand と reason が、intellectus と ratio からきれいに逆転している。」とおっしゃったが、どのように逆転しているのかを疑問に思う。前回、アイステーシス、ロゴス、ヌースの順に起こると学習したことから、今回はロゴスとヌースの起る順が逆になったことは理解できる。そのため、**方向のみが逆転**したということだと考えたが、実際意味も逆転したということだろうか。しかし、意味も逆転していれば、understand が計算で、reason が理解する力になってしまうので考え難いのではないかな。

今回は、前回に引き続き、理解し考える力というテーマでの授業であった。

前回の学生のコメントを拾ったが、知性や理性、悟性といった、哲学上の基本概念を正しく理解することが目的であった。

また、近代哲学における典型的な「理解」の理論についてだが、カントの『純粹理性批判』を見ると、全ての認識は感覚から始まり、悟性へと進み、理性において終わるとある

コメント [y39]: 順序が逆転したということは、機能が逆転したということです。つまり、ギリシア語の「ロゴス」が担っていた役割を「understanding (→もともとは「ヌース」の訳語)」が担い、「ヌース」が担っていた役割を「reason (→もともとは「ロゴス」の訳語)」が担うようになったということ。
他方、reason は計算能力という発想は維持されたので、全体として人間の理解能力が受動的なものになった。

が、これだけでははっきりと理解することは難しい。そこで、英訳を見てみると分かりやすい。例えば、日本語では「感覚」とあるが、英語では **senses** と表記されており、簡単な言葉になっている。つまり、哲学は日本語よりも英語の方が理解しやすいということである。

また、翻訳とは「同じ意味を別の言語に移そう」という試みである。しかし、翻訳の際に一語で置き換えるのは困難な場合がある。そのときは、文章で説明すれば、たいていは理解可能である。しかし、哲学用語は文章にするわけにはいかないため、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにも繋がる。

哲学の書を読むに当たって、日本語であるとやや難解な部分があるが、英語で見ると易しい文章で比較的意味を取りやすい。しかし、漢字にはその一文字のみでも意味を持っている。だから、日本語であったとしても漢字を見ると意味の予測はできる。もちろん、それが抽象名詞であると理解はしにくくなるが、そこで、前回の授業で教えていただいたように、抽象名詞がわからないときは動詞を見ることで理解できるようになる。

今回の授業は前回授業に連続して、近代哲学における基本的な概念の紹介と、しかしその概念の意味がかつてのギリシア哲学から少し変化していることにも触れられた。最後に哲学用語自体が長い時間の中で変遷し、意味が変化していったことから、もともとの用語を他言語に変換する翻訳の作業は難しいということでもしめられた。

前回のコメントでは、西洋哲学が日本に入ってくる段階で日本人知識人が儒学や漢学を中心に研究していたため、哲学という外のあるものを日本流に落とし込もうとして現代の日本人にはやや難解な和訳になったと書いた。実際は、それよりはるか昔に古代ギリシアで哲学が勃興してから、哲学というものは歴史の波にのまれて様々な国、言語に考えが渡っていくにつれ、すでに少しずつ変容して来たのである。翻訳家の山岡洋一さんが翻訳の難しさについて語っている。

「みんな、どうして翻訳が難しいということがわからないのかなあ。原文があるから簡単だなんて考える人が多い。逆なんですよ。原文がなければ自由に書けるんだけど、**原文**のある文章を書くというのは、ものすごく難しい作業なんです」
(<http://www.kato.gr.jp/yamaoka.htm> 2018/6/12 アクセス)。

さらに哲学は歴史の運命に翻弄されたともいえる。哲学の歴史については勉強不足だが、古代ギリシアはかつてローマに滅ぼされ、そのローマでもキリスト教という新しい思想が生まれ、それと結合してスコラ哲学が生まれる。かつてのローマ帝国一帯もやがてイスラーム帝国になり、イスラーム哲学が隆盛を極める。近代哲学が勃興したのちも日本にそれがやってくるまでドイツ語、英語、日本語となり替わってきている。逆に幾星霜もの間、研究が絶えず続いたことが驚きである。中々取りつきにくく、訳の分からなかった哲学が少しその成り立ちがわかってその大きさがわかった。

コメント [y40]: ここで山岡さんが言っていることと、私が授業で言ったこととは、少し違います。どこがどう違うか分かりますか？

大学に入って哲学系のことを学びたいという知り合いがいます。何かおススメ?の学び方はありますか?(フランス語をやるべきとか)(ざっくりしていません)

コメント [y41]: 徳島大学の学生であれば、直接話を聞きに来るようにお伝えください。他大学の学生であれば、その大学にも多分哲学の先生がいるでしょうから、その人に相談するとよいでしょう。

今回の講義は「悟性や理性」の説明であった。今回の内容も難解ではあったが前回ほどではなかった。

今回の講義で一つ疑問に感じたことがある。悟性や理性の説明の際、日本語の説明は難解であるのに対して英語の解説はなぜかわかりやすく感じた。これは一体何故なのだろうか。私は二つの仮説を考えた。

まず一つ目は、日本の論文を書いた人達があえて難解な語を用いて学を見せつけようとしているのではないかというものである。このような解説書を読むのは一般人よりも博識な大学教授が主になっている。そういった人たちを対象にしているのでナメられることのないよう難解な用語を用いざるを得ないのではないだろうか。

二つ目は、我々が英語の真髄を理解できていないということである。我々が英語を読んで理解したと思っているのは実は表面的にしか理解できておらず、筆者の意図することが汲み取れていないのではないだろうか。英語圏や英語が上手く使えるものなら汲み取れる意図があるのではないだろうか。

おそらく私があげた説の中に正解はないだろう。先生はどのようにお考えだろうか。

コメント [y42]: 歴史的な事実を検証すれば、正解はあるはずですが。一つ目については、訳語を作った人たちがどうしてそのような訳語にしたのかを説明した文献などが残っていれば検証できます。二つ目については、「我々」が具体的にだれを指しているのか不明です。「あなた方学生」ということであれば、きっちり英語を学ぶようにしましょう。ちなみに明治の先人たちは、むちゃくちゃ外国語ができました。

ヌースという言葉には理解する力、作り出す力という意味がある。しかし、同じ理性という日本語の訳語意味を持つインテレクトゥスは、理解する力という意味のみを持っており、インテレクトゥスや英語の Understanding は物事を「理解する」ということに重点を置いて使われていたことがわかる。また、日本語で哲学の思想を理解しようとすると難しく感じてしまうが、英語で見ると単語のレベルも低く、シンプルで分かりやすい。これは翻訳の回数を減らすことで本来の意味が日本語で読むときよりも直接的に伝わってくるからである。

近代哲学における典型的な「理解」の理論について。

カントによると、我々のすべての認識は感官から始まり、そこから悟性→理性と進み、終わる。しかし、理性を超えては直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらすべきより高次のものは、何一つとして我々のうちには見出されないと云う。

つまり、「理性」が人間の考えを司る最高の機能なのである。

また、理性や悟性というが、具体的にはどういったものなのか。

悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとすれば、理性は、諸悟性規則を原理のものへと統一する能力のことである。それゆえ、理性は決して最初の経験等に関わるものではなく、悟性に関わり、悟性の多様な認識にアприオリな統一を概念によって与える。これまで多数の英語やラテン語などが日本語に翻訳されて来たが、実際にいざ翻訳しようとする、それは難しいことである。その理由として、同じ言葉でも時代や国によって意味が異なることが挙げられる。しかしそれだけではなく、単語そのものの意味を理解することで、哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことが重要であるのだが、一単語に複数の意味を孕んでいる場合もあるため、一語で訳すことができないこともしばしばある。また、哲学用語だと、文章にするわけにもいかない、元の言葉が持つ意味の一部を切り捨てなければならない場合もある。

上記の例を挙げてみる。例えば、「存在」という言葉。ギリシア語では「オン」ないし「ウーシア」と訳され、英語では“Being”と訳す。ギリシア語の翻訳の意味はBe動詞の名詞形である。Be動詞の意味=存在と繫辞(〜だ)と訳されるため、つまり「存在」という訳では十分に意味しか訳されておらず、不十分なのである。これが、哲学の主要なモチーフの一つである「存在論」が、日本語で理解しがたい原因の一つになっている。

言葉で哲学の基本概念を理解しようとする、我々日本人にも理解できるように日本語に翻訳する過程が踏まれる。その際に小さくても差異が生じていることを理解しなければならない。一つの言葉を聞いて意味を理解した気にならず、まだ自分の未知の意味、概念があるのではないかという、**疑問を持つことが重要**になる。

今回の授業では、近代哲学における典型的な「理解」の理論、英訳について学んだ。カントの理論は、感官(sense,五感)から始まり、悟性(Understanding)、終わりは理性(Reason)だ。概念区分で理解するということだ。一つ目の英訳にもあるように、understanding→reason は完全に悟性と理性が逆転している。また、カントの考え方として「感覚はモノそのものではない」、「具体的な経験から出来たものとは関わらない」がある。英訳の二つ目に関しては、understanding と reason,intellectus と ratio が逆転している。これら二つの英文を日本語で読むよりもそのまま英語で理解するほうがわかる。

今回は哲学用語における言葉の意味についての復習をした。今回の授業は主に学生のコメントに書かれていた疑問を山口教授が解説していくという形式だった。今回の授業を受

コメント [y43]: 原文で読んでみるの方が重要ですし、具体的な作業として練習できます。

「疑問を持つことが重要」と言っても、実際には何もしないことが多いでしょう。

けて確信したことは、哲学書は日本語に翻訳したものよりも英語に訳されたものが読みやすいことだ。本当は原語を読むことが一番良いことかもしれないが古代ギリシア語の訓練を受けていないみでは読むことは現時点では困難なので今回は英語に訳したものを讀んだ。

しかし、日本語に訳した哲学書はどうしてこんなにも難しいのだろうか。山口教授のレジュームには「翻訳とは『同じ意味を別の言語に移そう』という試みです。いちごで置き換えることが困難な時もあるが、文章で表せば大抵のことは理解ができる。しかし、哲学用語だと、文章にするわけにはいかないの、元の言語の意味が一部削られることになる」と書かれている。

私はなぜ哲学用語を訳すことに文章を用いた表現をすることができないのかわからない。多くの海外の文学作品では意識が用いられているのにもかかわらずだ。

コメント [y44]: コメント y22 を参照。

我々の知識は全て感覚から始まり、そこから **understanding** が生まれ、**reason** へと至る。**reason** を超えるものは我々の内には存在しない。翻訳とは同じ意味を別の言語に移そうという試みであって、文章で書けば理解できる場合が多いが、哲学用語などは文章で書けない。そのため、意味の一部が切り捨てられたりする。

日本語で翻訳したものが理解しにくいのは、日本語がヨーロッパ圏の言語からかけ離れていることもあるが、**訳者があえて難しい表現を使っている**ことが一番の原因である。英語のほうが理解しやすいとはどういうことか。難解な言葉を使いさえすれば高尚な論に見えるというのは大きな間違いである。高校で学ぶ倫理も暗記教科と化している。哲学とは難解なものという先入観を取り払うべきだ。

コメント [y45]: 「あえて」そんなことをしている訳者はいないでしょう。

翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みであり、一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいてい理解可能になる。しかし、哲学用語だと文章にするわけにもいかないの、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。「存在」はギリシア語では「オン」ないしは「ウーシア」=ギリシア語の **Be** 動詞の名詞形。

哲学に興味があり、それに関する本を読もうと思うのですが、どの哲学者の本を読んだらいいのかや原文がいいのかに日本語訳のものの方がいいのか全く **検討見当**がつかえません。先生のオススメの読み方やオススメの本はないでしょうか。

コメント [y46]: 具体的にどのようなことに興味があるのか、もう少し特定してください。「哲学史全般」を知りたいのであれば、講談社メチエの『西洋哲学史』全4巻、全部読むのがしんどいなら1巻、2巻ぐらいまで読んでみるとよいでしょう。私が今書いている本が、今年中には出ると思いますから、出たら買って読んでください。個別の哲学者については、著名な哲学者であればたいてい概説書がありますから、とりあえず読みやすそうなものを読んでみるとよいでしょう。

今回の授業ではまず、近代哲学における典型的な「理解」の理論について学んだ。カントによると、私たちのすべての認識は感官から始まり、そこから悟性へと進み、理性を越えては、直感の素材を加工してそれを最高の統一にもたらすべきより高次なものは、何一つとして私たちのうちに見いだされないという。では、悟性と理性は具体的にどのようなものなのか。悟性とは、規則を介して諸現象を統一する能力である。そうであるとするならば、理性とは諸悟性規則を原理のものへと統一する能力となる。そのため、理性は決して最初の経験、または何らかの対象にかかわるのではなく、悟性にかかわるのである。このようにして、悟性の多様な認識にアプリアリな統一を概念によって与えるのだが、このアプリアリな統一は理性統一と呼ばれてよい。そして、それはまた、悟性によって成される統一とは全く異なるものなのである。

次に前回の要点であった、ヌースとロゴスの訳についてである。この二つはどちらも「理性」の意味を含むが、ヌースは理解する力・作り出す力を指す言葉であった。ロゴスとは、計算の意味を含む言葉であった。つまり、ヌースの訳としての「理性」と、ロゴスとしての「理性」は異なるのである。ここで、翻訳とは「同じ意味を別の言語に移す」という試みのことであり、翻訳を実際にする際、一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明することによって、理解できるようになるのがたいていである。しかし、哲学用語では文章にすることは不可能なため、元の言葉の一部が切り捨てられることになってしまうのである。

哲学において、言葉を翻訳することは非常に難しく困難なことであり、本来備わっている意味の一部が失われてしまうこともあるが、翻訳された訳だけを重要視するのではなく、元々含まれている意味も大切にし、理解することが重要である。

今回の授業の内容は、前回に引き続き、哲学の基本概念についての話だった。悟性とは規則を介して諸現象を統一する能力であり、理性とは、諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。我々のすべての認識は感官から始まり、そこから悟性へと進み、理性において終わり、理性を越え出ることはない。これが近代哲学における典型的な理解の理論である。知性、理性、悟性など、哲学上の基本概念を正しく理解することは重要である。

翻訳において、一語で置き換えることが困難な場合でも、文章で説明すれば理解可能になるものだ。だが、哲学の基本概念を翻訳する際は、しかし、哲学用語だと、文章にするわけにもいかないので、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。そのため、基本概念を正しく理解する必要があるのだ。

今回の授業は前回の授業に引き続いて、理性や悟性などについてその言葉の意味やカントの『純粹理性批判』の日本語訳、英語訳文を参考にしながら考えていく授業であった。近代哲学の典型的な「理解」の理論は、感覚によって appearance をとらえ、understanding で秩序を与え、reason で概念を与えるということであった。また言葉の翻訳に関して、一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すればたいてい理解可能になる。しかし哲学用語だと文章にするわけにいかないのが、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。ということだった。

哲学用語を翻訳すると、本来の意味の一部が切り捨てられることがあるというのは懸念すべきことだ。過去に残された言葉、その意味が完璧な状態で伝わらず、一部だけ伝わってしまうと、切り捨てられた部分や訳された言葉のニュアンス次第で言葉に誤解が生じてしまい、その本来の意味を理解するのが困難になってしまうからだ。また授業で言われていたように哲学に関しての文献は基本訳されていない原文のまま読むとのものであった。それは言葉本来の意味を理解するには良い方法である。しかし今度はそれを行うために相応の語学力が必要となる。よって原文、訳文どちらを用いても哲学用語を理解するのは簡単ではないが、言葉の理解に重点を置くなら、簡単に読める訳文より困難であっても原文で読むべきだ。がんばってください。

今回の授業では、前回の授業で学んだ同じ「理性」という訳でもヌースにおける理性とロゴスにおける理性では異なっているということを確認した。また、悟性や理性について日本語で書かれている文章が難解でも英訳すれば簡易的な英語として表すことができるとわかった。そして、哲学用語のように別の言語に訳す時に、簡単に置き換えることは難しく、元の語の意味がなくなってしまうことがあることも知った。

今回の授業では、学生のコメントについて回答し、前回の授業の内容を深めていった。前回、ギリシア語のヌースは日本語で理性、知性と訳し、ロゴスは、理性、論理と訳すと学んだ。また、ラテン語のインテクトゥスは日本語で知性と訳し、ラチオを理性と訳すということも学んだ。こういった訳語の混乱により、日本語に訳された文献を理解するのが難しくなっている。だが、英訳された文献を読むと理解しやすい。例えば、カントの『純粹理性批判』超越論的弁証論・序論を坂部恵が訳した『ヨーロッパ精神史入門』という本を理解するのは難しい。だが、Norman Kemp-Smith が 1929 年に英訳したものは、理解しやすいものとなっている。翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みである。一語で置き換えられることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいてい理解可能になる。だが、哲学用語だと、文章にするわけにもいかないのが、元の言葉の一部が切り捨てられることにもなる。

今回の講義は前回、前々回講義の補足説明を行った。前回の授業のポイントは、ロゴスの訳としての「理性」と、ヌースの訳としての「理性」はそれぞれ持つ意味が異なるということだ。前者は「説得や論証の手段」という意味で、後者は「理解し、理解に基づいて何かを作り出す力」という意味である点で両者は異なる。

古代ギリシアの哲学者達はこの二つの能力とアイステーシス「感覚」を踏まえオリジナルの「理性」についての説明を行った。それは「理性」を「感覚」して対象の情報を得、次にロゴスによって情報を論理的に組み立てて、そしてヌースによって対象を理解し新たに何かを生み出すこと」と捉えたものだ。

しかし、近代哲学において「理性」の在り方は変容してしまった。近代哲学では「理性」とは、「対象を「理解」（「悟性」によって対象を理解し、そしてそれによって得た情報を推論すること）」を「理性」の在り方だとするようになった。

何故このような変容が起こったかと言うと、当時西洋哲学界において影響力が大きかったデカルト哲学では「世界は全て図形で表せられる」と説かれていたことが大きい。デカルトによると、私たちは対象が何であるかを推論する前に対象が「どうであるか」を理解できるという。そしてその為、彼は対象が何であるかを「理性」によって捉えるということにおいて、「ヌース」が「ロゴス」に先立っているという結論を下した。

コメント [y47]: これは rationalism (計算万能主義) の思想であり、理論物理学の基礎となる思想でもある。
(理性と悟性の逆転とは、直接関係ない)

訳語の交錯は原文を読むとよくわかる。たしかに原文・英訳・和訳と訳語がずれている。下手に日本語で読むよりも多少苦勞しても原文や、せめて英訳で読むとずれが少なく済むであろう。翻訳はある言語で記述されているものをほかの言語で言い表すことである。この時、二つの言語間で同じ意味の語が1対1対応で存在するとは限らないので、元の言葉の意味を一部切り捨てるころになったり、若干のずれが生じたりすることもある。しかし、単語を単語で訳すことにこだわらず、文章で説明すれば基本的にそのままの意味で理解できる。

理性は計算能力のことを指すのは前回述べたとおりであるが、これを用いて世界のすべてを説明できるというのがデカルトの主張であった。たとえば、身の回りのものの形は計算では求められないように思えるが、xyz の三軸をとった座標空間に関数という形で数学的に記述できる、といったものだ。

今回の授業は、主に前回の授業の復習だった。前回の授業の要点はヌースの訳としての理性とロゴスの訳としての理性は異なるというものだった。つまりヌースは理解する力に

加えて作り出す力があることだ。~~デカルト~~や~~アリストテレス~~は計算することですべてがわかるという立場だった。哲学では現実より論理のほうが重視される。しかし先生は賛成していない。なぜなら世界が計算通りに動くとは限らないことが現実でわかるからだ。

さらに今回の授業でも具体的なものから出発してわかることが大事だと繰り返されていた。そして著者も単語の意味の違いをわからずに使っているかもしれないから、語源から意味を理解することで著者以上の理解をすることができる。

翻訳の際に生じる微妙な意味の差により生じる違いが見受けられた。それは understanding と reason の順番である。感覚に入ってきたものを統合するのが understanding であり understanding はヌースの訳語である。そして reason は understanding の積み重ねでできた抽象概念を操作する(普遍的に成り立つ)のであり reason はロゴスの訳語である。前回の授業ではロゴスを使ってヌースが行われると学んだ。しかし今回の授業では understanding からの reason なので順番が逆になっている。

さらに感覚から概念が作られ、普遍的結論へと至ることを学んだ。例には円周角の定理があがった。

また西洋哲学では理性は普遍、対話は必要ないという見解が強いことを学び物事を理解しそれにもとづいてどうするか考えること(理性)・西洋哲学では理性は普遍的という考えが強い一人でも考えてもみんな同じ答えがでると考える傾向が強いと知った。

そして翻訳は最も近い言葉文章で表現すればたいいうまく訳せるがにするか、新しい概念に対応する言葉については、新しい言葉を作ることかになることも学んだ。英語のほうが単語レベルが簡単であるため日本語での翻訳を読むよりわかりやすかった。

今回の講義では、「理性」と「悟性」の意味について学んだ。前回、前々回から学習しているヌース・ロゴスは、世界を知るための力である。

近代哲学における「理解」の理論は、感覚(感官)・sense-から始まり、悟性-understand-へ進んで理性-reason-で終わる。つまり、我々が感覚で捉えた個々の現象を概念で統一し(understanding)、それに意味付けする(reason)。

具体的に悟性・理性とは、「悟性」が規則でもって現象を統一する能力で、「理性」はその規則を原理のもとに統一する能力である。

前回の講義で勉強した、古代ギリシアにおけるロゴスとヌースの関係は、ロゴス-reason-を使ってより高次のヌース-understanding-を行う、というものであった。しかしこれが近代になって、上にも書いたように「Understand」から「Reason」へ、というふうに逆転している。

このように元々の言葉が外来のもので、尚且つ哲学用語のような、抽象的な概念を表現する言葉は一語で置き換えるのが困難な場合が多い。また、一語で置き換えるのが困難だ

からといって、文章にするわけにもいかないため、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることもある。そうしたことによって、さらにこういった言葉の意味の理解が難しくなる。

元の言葉の意味の一部が切り取られた語の例として、「存在論」がある。この言葉は、「存在(〜がある)」という意味の他に、「属性」を表す意味もあるが、日本語の「存在論」に使われた「存在」だけでは「属性」の意は伝わらない。

「理性」や「悟性」という言葉の意味・訳語を正しく理解することは、哲学を学んでいく上でとても重要である。これらの言葉は哲学の基本概念であるし、哲学の意義である「世界について知ること」の第一歩だからだ。

近代哲学における典型的な「理解」の理論は、カント曰く「われわれのすべて認識は感覚から始まり、そこから悟性(verstand)へと進み、理性(vernunft)において終わるが、理性を超えては、直観の素材を加工してそれを最高統一にもたらすべきより高次のものは、何ひとつとしてわれわれのうちには見出されない」。また、悟性とは、規則を介して諸現象を統一する能力であり、理性は、諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。